

に浮かれて居る者には宗教心は起らない。ネオンやジャズの渦巻く眞只中にも一種の寂しさを感じるやうにならねば宗教心は起らない。櫻花爛漫、満都の男女浮かれ／＼て家居に堪えない陽春四月の候一種の春愁を感じる底の者ならば、宗教心は起つて居るに違ひない。所詮宗教は寂しい、其寂しい底から湧き出しで来る歡喜ならでは宗教上の歡喜ではない。宗教の開祖は勿論、大詩人、大美術家は何れも宇宙人生に對して、此寂しさを感じたものが多いやうである。支那の杜甫、李白にしても、日本の芭蕉、鬼貫にしても、其名吟傑作と讃へらるゝものは、何れも一種の寂しさを含んで居るではないか。雪舟の山水、探幽の花鳥を見ても、私は此寂しさの漂ふものゝ多いやうに感ずる。此寂しさから宇宙人生の深さが生れ、宇宙人生の深さを感ずる所に、宗教の情は萌して、宇宙人生の神秘を憧憬する。宇宙人生の神秘の憧憬はやがて廣意の奇蹟の信仰となり、奇蹟を尋常茶飯に迄延長して、宇宙人生に敬虔の念を起し、感謝感恩する所に宗教心は展開して行く。彼の浮き／＼と感覺的の享樂を追ふて、何等人生を諦観することの無い人物には宗教心は起らず。随つて其様な人物の生活には人生の深みが無い。文學でも笑ひの文學には何としても深さが無いが、悲しみの文學、寂しい文學には深みがある。同じミルトンの傑作でも、失樂園の方が復樂園よりも深みがある。

私は第五章に於ては、奇蹟の範圍を常識的に狭くして論述したが、其狭い意味の奇蹟が、眠れる人

心を驚起せしむるに、大なる功ある可きは已に論じた通りであるが、如何せん其様な奇蹟は容易に現はれない。だから其様な奇蹟のみを當てにししは宗教心は起り難い。然し、私は宗教には奇蹟的要素奇蹟的と想へることが無くてならぬと信ずる。そこで前述の如く奇蹟の範圍を擴げて見て、こゝに宗教心の萌芽を植え付けんと試みた。想ふに此試みは感傷的に過ぎるとして、一場の笑話に葬り去るものもあらう。それも致し方が無い。所詮宗教は科學のやうに萬人をして、等しく首肯せしめることは不可能である。縁無き衆生は度し難しとは止むを得ざる宗教上の悲哀であらう。然し、よしやキリストの復活昇天や、眞宗の指方立相は信ぜないとしても尋常茶飯事にも、不思議の運命の動けるものなることは少しく考察力のあるものは理解し得るであらうから、之れを善意に解して人生を感謝に生きただけでも已に宗教の圈内に入つたもので、人生の淨化運動はこゝに其足場が置かれるのでは無からうか。社會を階級闘争場と觀するマルクス主義では、人生の淨化は出来ない。勿論現在の經濟組織には幾多の缺陷がある。然しマルクス流に階級闘争意識を煽り立てるのみでは、さもなくとも生存競争の激烈なる人世をして益々修羅場たらしむるのみである。マルクスの階級闘争説を精神的にしたものが、ニーチエのツアラーストラである。此は感謝忍辱の生活とは正反對な説であつて、對照的に關係が多いと思ふし、又今迄私の述べ來つた宗教觀念とは、非常に色彩を異にするものと思ふから、參

考の爲めに其要領を述べることにした。

第十一節 ニーチエの超人主義の没落

フリードリッヒ・ニーチエは、千八百四十四年に獨逸のザクセン州に生る。父は新教の牧師で、極めて温厚の人であつた。彼は天長節に生れたので、父は大いに悦び、皇帝の名をとつて、フリードリッヒと命名したのである。母は美しい野蠻人と仇名された程、快活強壯な女であつた。ニーチエの性質は、其初め父に似て、温和無口で、身体も弱い方であつた。五歳にして父を失ふた。ニーチエは四歳の時から早く已に、読み書きを覺えた。情熱的ではあつたが、克己心が強かつた。子供の時から孤獨を愛し、憂鬱の性質があつた。彼の祖母はナポレオン崇拜家で、頻りにナポレオンの話をして聞かした。音楽が好きで、十歳の時に巧みなる即興樂を作つて、母を驚かした。詩もその頃から作り出した。千八百六十二年にボン大學に入り、頗る克己的な謹嚴な學生とせられた。次でライプツヒの大學に遷つた。ライプツヒでは言語學を選んだ。居ること四年、軍隊に入つたが、落馬して長く病床の人となつた。學生中に草した、博言學上の論文が、バーゼル大學の注目する所となつて、同校の教授となり、ライプツヒ大學からも、博士號を贈られた。時に年僅に三十五歳。此間に彼はシヨツ

ベンハウエルを知り、ワグナーを知り、この二人の非常な影響を受けた。シヨツベンハウエルは、著書の上で、ワグネルからは友人として、普佛戦争の起るに際し、彼も出征して病を得、一生涯苦しんだ。一面より云へば、彼が唱へた意志哲學即ち戰の哲學は、病苦に對する戰の中に、孕まれたと云つても宜しい。彼曰く「私は苦痛が吾等をよくするや否やを知らないが然し、少くともそれは吾等をより深くする」と云つた。千八百八十五年に、彼の畢生の大作「スワラート・ツアラストラー」を著した。千八百八十九年(四十五歳)の正月より、彼の頭腦は異狀を呈し初めて、哀れ發狂者となつてしまつた。ニーチエを動かした、哲學上の根本思想は、シヨツベンハウエルの意志哲學であるが、シヨツベンハウエルは、消極的に走つて遂に、佛教の涅槃説のやうになつたが、ニーチエはその反對に出て、積極的に意志を肯定し「人生が苦しければ苦しい程、我等は強き意志を要する。其苦しみと對抗する所にこそ、美と力とは發揮されるのだ」と主張した。「人生が無意味ならば、我はそこに一つの意味を興へやう。自ら生き甲斐ある人生を造らう。もう一度と喜んで迎へる様な人生を造らう。斯んな生活ならば、幾度び繰返されても、永久に繰返されても望ましいと云ふやうな、人生を造らう」之れが彼の超人哲學の根本思想である。ツアラストラーと云ふのは、ニーチエが己れの理想を寓した人物の名である。

ツアラストラは常に、其左右に蛇と鷲とを携へて居た。蛇は宿命的な永久輪廻の象徴であり、鷲は向上的にして創造的な超人の象徴である。彼の考では、今の人間は、動物と超人とのパツスであつて、それ自身に目的はない。ニーチエの超人説には勿論、進化論の影響は受けて居るが然し、進化論は境遇を主として、生物はそれに順應して、種族を保存すると説くが、ニーチエは、権力意志を主として、其意志によつて、境遇を征服して行くとする。超人の性質は全く基督の教へに反対である。「自然に歸れ」とはルウソウの叫びであつたが、ニーチエは「本能に歸れ」と絶叫した。本能の中に眞の自我はある。本能を外にしては、自我は無いと云ふので、彼の自我主義は、即ち本能主義である。超人の道德は、現實的であつて、非理想的である。在來の信念によれば、有徳の人とは、一定の理想を立て、克己勉勵、眞と善との道に入るのであるが、ニーチエは賢き人とは、自ら價値を創造する者を云ふのである。一切の自然は無價値だから、人間は之れに價値を與へるのである。その新しい價値表を造ること即ち、新價値を創造することが、何よりも大事である。從來の宗教、哲學、道德を排斥して新しき、價値表を作らねばならない。眞偽善惡と云ふものも、價値の問題で、我等の爲めに價値の高いものが、眞理でもあるし善でもある。兎は獅子にとつては頗る價値があるが、羊にとつては何の價値も無い。人間の善は、動物の善でなく、野蠻人の善は文明人の善で無く、一國民の善は、他

國民の善でない。善惡眞偽と云ふものは、古來幾度か變遷して居る。人間の價値表は、幾度も改められて居る。然るに、現代の宗教や道德は、飽くまでも、古き價値表を守つて、人間の進化を妨げて居ると。こゝに彼の主張は、其クライマックスに達して、其結果、基督教道德を奴隸の道德と罵倒し、彼自らは君主道德を主張した。君主道德は即ち、超人の道德である。君主道德に於ては、強きものを益々強からしめ、盛んなるもの大なるものを益々盛大ならしむるものが善である。奴隸道德に於ては弱きを憫み、力無きものを助け小なるものを保護するのが善である。だから基督教道德は、奴隸道德である。弱者の道德である。生の擴張を妨げ、本能の發揮を妨げ、人間を畏縮退化せしむる道德である。彼曰く「善とは何ぞ。威力を感じ、威力を欲するの心を高める總てのものである。人間の有する力それ自身である。惡とは何ぞ。弱より生ずる一切のものである。幸福とは何ぞ。抵抗に打克つた感じである。満足の念ではなくして更に大なる威力、必ずしも平和にあらずして戦闘、徳に非ずして能力それが幸福である。弱きもの缺點多きものは、苦めらるべきである。吾人は彼等が苦しめられる加勢をしてやるべきである。罪惡よりも猶有害なるものは、弱き者缺點多きものに對する、實際の同情である」と又言ふ「總てのものは皆、永遠に輪廻しつゝある。人生はそれ自身を超越するサムシングでなければならぬ。超越の半面は征服である。征服は戦闘である」。

斯くの如くニーチエは極端な説を唱へたが、彼自身の日常生活は案外温和謹厚であつた。即ちニーチエ哲學は反性哲學であつた。

之れを前にしてはユダヤ民族あり、之れを後にしては獨逸人あり、何れもニーチエ主義に近い信念を有して居る。國亡びて山河舊の如くなるのみならず、ユダヤ民族は、國家的には早く滅びて居る筈であるが、民族的には今尙世界に分布して、嚴然たる民族意識を有して居る。否、民族意識を有して居るのみならず、彼等は相率ゐて、神の選民たるを信じやがては、世界の民族を統轄す可く、切々として其準備工作に熱心して居る。ユダヤ民族からは、古今不思議に傑出せる學者を出して居る。又ユダヤ人の金銭の蓄積に長じたることは、眞に驚く可きもので、ロンドンと云はず、パリと云はず、彼等の富力は偉大なもので、聞く所によれば、ニューヨークの富の六割迄はユダヤ系の手にありと云はれて居る。彼等は此富の力と、其優秀な智識とに依つて、世界一統を夢みて居る。マルクス主義を舞台として、日本に迄も其手を伸ばして居ると云はれて居る。先きにナチスの現獨逸政府が、秦の始皇の書を焼き儒を坑にした亂暴な眞似をして、ユダヤ系を獨逸國內より掃蕩したことは、世人の記憶に新たなることであるが、此は全くユダヤ系の陰謀を恐れたゆゑと云はれて居る。實にユダヤ民族がエホバの選民振りを貫徹せんとして、歐洲到る所に虐待迫害せられながらも、陰忍して其信念を改め

ざるは世界の一奇である。

世界大戦前の獨逸人が、また世界の選民を以つて自ら任じて居たことは、隠れもない事實である。カイゼルは實に其發頭人であり、中心勢力であつた。彼等は傲然として、眞のカルチユアは獨り獨逸人のみ之れを有して居る。他の國民には文明はあつても、眞の文化は無いと言ひ放つた。此選民觀はカイゼルを中心に、國民の間に蔓延して、之れを實現せんとしたことが、世界大戦の見えざる動因をなしたと云はれて居る。そして此選民觀はニーチエの超人主義に負ふ所多しと聞く。

ニーチエ主義は、強者の權利主義を極端に迄走せたものである。強者の權利は動物界には現實に行はれて居る。虎豹の千里の野に相打つは、其最も具体的にして勇壯なる一例である。否、動物界のみならず、人間界にも或點迄は強者の權利主義が行はれて居る。特に國家と國家と相對抗する場合は、強者の權利をまざくと見せつけられる。今や伊太利はエチオピアを彈壓せんとして、二十數萬の兵をエチオピアの國境に進めて居る。道理上からは伊太利に無理があることは、我々の疑はぬ所であるが、其無理を強行せんとしてある事實は、強者の權利の生きた一例である。所が伊太利の横車押しを壓せんとして、英國は其大艦隊を地中海に集中して居る。伊太利は國際聯盟の決議文は突破したが、英國の大艦隊の前には悲憤慷慨しつゝも、屈伏の止むなきに至りさうである。強者の上に強者が

ある。

此の如く國際間には動物界と同じやうに、強者の権利が横行濶歩して居るが、國家内に至つては國際間程甚だしく、強者の権利が露骨には行はれて居ない。智識に於て、金力に於て、弱者である民衆は、昔時に比すれば次第に認められて來て、社會萬般の施設は餘程民衆本位になりつゝある。此趨勢は世界的である。そして將來は益々此趨勢が強くなるであらう。ニーチエの超人主義と反對に、凡衆主義に墮し過ぎつゝある感さへ多い。雷に國家内のみならず、國際間でも今日は國際間のバランスが敏感であるから、強者の権利も餘り露骨には振へぬやうになつて來て居る。第十五世紀から第十八世紀にかけて、白人種が其文明に一日の長あるを武器として、有色人種の國土を横領したやうな強者の権利振りは、二十世紀の今日では如何なる大國も夢想することさへ出来なくなつた。それだけ強者の権利が束縛されるやうになつたと云うか、強者と弱者との差が少くなつたと云うか、或は弱者も團結して強者となつたと云うか、兎も角も昔とは非常に其趣が變つて來て、今日は寸壤尺土も容易に奪取するなどと云ふことは出来なくなつた。

其上航海能力の發達、電氣應用の發達、貿易の隆盛などの爲めに國際間の利害は複雑となり、實際は濃厚になり、強者の権利を振り舞はす事情は、次第に少くなつて來る。こゝにニーチエ主義は、獨

逸のカイゼルの世界一統の夢破れてからは、實現の望は絶えた。此夢を破る爲めに、七百萬人の壯丁を殺し、七百五十萬人の廢疾者を出し、戦費のみに二千十億萬弗を消耗したとは、餘りに其犠牲の巨大なるに驚かされるのであるが、然し犠牲の巨大なだけ、後世長くカイゼルのやうな夢を見るものは無くなるであらう。

進化を強調し人間の意志を鞭撻する方面から見ると、ニーチエ主義にも面白い所はあるが、然し何としても戦闘を眞向に振り翳しては、人生は殺伐極まるものとなつて、互に相傷くの外なし。本來我々人間には、誰もニーチエ主義に似た自我昂進方面と、没我歸命の方面とを具へて居るものではあるが、此中自我昂進の方面は、自然に委せても、昂進し過ぎ勝ちなものであり、没我歸命の方面は之れを培養せなければ、自我昂進方面に壓倒せられ勝ちである。五千年の昔、支那の聖人が「人心惟れ危く、道心惟れ微なり、惟れ精、惟れ一、允に克く其中を執る」と云つたことは、今日と雖ども我々の鑑戒する所であらねばならぬ。

所で此道心、没我歸命の方面を發達長養することが、道德や宗教の任務であつて、其最も肝要な道程として、私は前節に感謝の念を強調したのであつた。然り、感謝の念より湧き起つた活動を外にしては人生の淨化運動は起り得ないと信ずる。政治や、法律や、其れは如何に進歩しても、社會の正義

を維持するに過ぎない。正義の維持、それは社會國家にとつて大切なものには違ひないが、未だ消極的の淨化運動に過ぎない。積極的の社會淨化運動は、社會民人をして感謝に生きしむるやう導くことを外にしては、十分なる効果は擧げ得るものでない。不思議の運命のよき廻り合はせに遇はなければ我々は一食にも有りつけないと云ふ、奇蹟觀より呼び起された感謝生活は、已に人と人との關係を基準とせる普通道德の範圍を越えて、宗教の圈内に入つて居るものとすれば、社會の淨土運動は宗教の力を借らなければ徹底しない。社會の淨化運動と云ふ大きな問題にせずとも、我々一個人の幸福にしても、普通道德の範圍内に止まつては、未だ十分に實現するを得ない。進んで宗教的情味を感じる所迄行かなければ、到底深みのある人生の幸福を体得することは出来まい。唯尋常茶飯事に奇蹟を發見することすらも、凡ての人には、容易には出来ない程であるから、指方立相と云ふやうな、大奇蹟の信仰は尙更困難である。さればとて、之れを信じなければ、他力本願も成り立たない。親鸞が「一代諸教の信よりも弘願の信樂なほ難し、難中の難と説きたまひ、無過此難と述べたまふ」と歎ぜられたのも、さこそと察せられる。他力本願は易行道であつた筈が、かうなつて見ると難行道になる。さりとて普通難行道とせられて居る自力門、華嚴、天台、眞言などは、其哲理は理智的な今日のインテリに於て、必ずしも理會し得られざるに非ざるも、其は唯論理的に概念を易置する程度に過ぎないで、

宗教的の体得は戒、定、慧の三者具足するに非ざれば到底達せらるゝものに非ずとあつては、自力門も、他力門も、共に難行道と云ふの外はない。インテリの宗教に徹するまた難いかな。

第十二節 宗教の曖昧性

「死後の生存」を著した、英國心靈現象研究會長オリヴァ・ロツヂ博士は云ふ。未來世と現世との通信の可能は今や時の問題である。之れを喩へば甲地と乙地との兩端からトンネルを穿つて居るやうなもので、今や其残された未鑿の部分は僅少であるから、日ならずして貫通するであらうと。果して然るか、ロツヂ博士の此言を發してから後、已に二十年許りの歲月は流れたが、現世と未來世との通信は愚か、單に未來世の存否と云ふことのみすら疑問を以つて満たされて居る。勿論、靈媒などの言ふ所のものを其まゝ信用すれば、未來世の存在どころか、通信もなされて居る次第であるが、其れが亦幾多の疑問の叢り起るを如何ともしがたい狀況にあるを見る。日本でも西洋でも、靈能者が念動とて、室内の椅子や卓子を靈の力のみで動かしたり、死靈を呼び出して通話したりする場合には、室を暗くして行ふのが普通のやうであるが、其處にトリックの行はれる事情も伏在し易くなる。手品師などは數百の觀客を面前に置いて、白晝公然と演技を行ふのであるが、我々は眼を皿のやうにして注視

してすら、其トリックを發見することが出来ないのである。之れから考へると、暗くした室内に行はれることには、如何なるトリックの伏在するや測り知られぬ。さればとて、前にも屢々述べた通り、私は決して靈能者の凡てがトリックを行ふなどとは云ふのではないが、然し、遺憾ながら頗る曖昧状態にあると云はねばならぬ。

ラヂオが始めて放送されたのは、西紀千九百二十年、北米合衆國に於てであるが、爾來歳を重ねること僅に十五年、世界各國山村水廓に至る迄普及せざるは無く、何れはテレビジョンと併用して、我々は居ながらにして、世界各地の出來事を見聞し得るやうになるであらう。我々は結果の上のみから見ると、科學應用の確實性を信ぜざらんと欲するも能はざるを知る。之れと對比すると、靈界通信の進歩の遅々たることが今更の如く強く感ぜられる。他なし、科學の應用は一學者の實驗の結果は、其まゝ次の學者に依つて繼承せられ、かくして一歩／＼確實に進展するも、所謂靈能者の間には、此繼承性を缺ぐので、幾世代を経ても殆んど同一地點をのみ循環して居るに過ぎない。此過去の實狀より推して、私はロツヂ博士の豫言を危むものであるが、さりとて死後靈界の有無を措ては、到底宗教は其使命を半減するものであつて見れば、今後の推移を待つの外は無い。

世界大戰の慘劇は、關係各國を恐畏せしむること最も強く、再び斯かる慘禍を繰り返へす如きこと無

からんことを切望するの餘り、スイス國デユネーヴに、世界平和聯盟の本部を置き、各國の代表……それは各國の選出せる最も優秀なる人物を集めて、平和の工作に力を盡して來たが、結果は遅々として進まず、否、聯盟の使命其ものが今日は疑問視せられるやうになつて、各國は又々軍備擴張競争に國力を蕩盡するも、敢て之れを辭せずと云ふ狀況に至りつゝあり。伊多利とエチオピアとの間に、風雲益々急なる今日此頃、世界各國は之れを導火線に、再び世界大戰を惹起するやうなことは無からうかと非常なる關心を持つて居る。我々が人類五千年の歴史を回顧し、現在世界の形勢を大觀する時、世界各民族間の商工、學術等の協同進歩は歲月と共に著しくなるに不拘、各民族の國家意識は寧、益々強固さを如へ、所謂世界的國家即ち世界の民族を打つて一團とせる所の人類的國家なるもの、建立は全くユートピアに過ぎざるかを痛感せしめられる。こゝに道德教育は依然として國家本位に施されねばならぬことに歸着する。大學の書には、個人修養の順序を明記して、格物致知、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下となつて居るが、平天下を世界的平和と見れば、此は到底理想否空想と云ふの外はいが、治國迄は平等的、普遍的に世界各國の實現し得る所たるは疑ふ可からざるものである。随つて世界各國の教育、修養は格物致知より次第に進んで、治國の責任に迄進まざる可からざることとは明白であると同時に、事實其方針に順ふて居ると見て可いのである。固より修身、齊家及治國の

事は各國の團體、風俗、習慣、制度等の異なるものから、其内容に差異ある可きは言を待たざるも、一國としては其内容の進路粗、一定せるものあり。

翻つて宗教界は如何と見るに、靈界は其本質上まさか地上世界のやうな、各國競立の状態に類する差別相は無かる可く、随つて靈界は普遍性、平等性に富んで居る可き筈であり、又随つて此靈界に行く準備、即ち宗教的修養も、國家の如何や民族の差別を超越して普遍的、平等的である可き筈なるに不拘、世界幾百千種の宗教が、何れも自宗本位の排他的であると云ふの事實は、誠に奇怪千萬と云はなければならぬではないか。世界二大宗教の一に數へらるゝキリスト教は、明かに未來天國と地獄とを認め、個人的靈魂の不滅をも認めて居ればこそ、最終の審判を標榜するのである。之れと異り佛教は、因縁所生説を唱へ、無我説を採り、キリスト教とは正反對に在り。無論、佛教中でも淨土教はキリスト教に類したる指方立相説あるも、佛教全体の立場は正にキリスト教と對蹠的である。さればこそ淨土教非佛説の論も在るのである。そして佛教徒は基督教を罵倒し、基督教徒も佛教を痛撃し、各自宗に籠居し、自宗のみが唯一の眞宗教で、他は悉く外道であり、邪教であると叫ぶ。

次に、同じ佛教と名乗りながら、自力宗と他力教とは正反の地位に立ち、自力教の者は他力教を以て、愚夫愚婦を欺瞞する外の何ものでもないと貶し、他力教の者は自力教を目して、自力に依つて成

佛せんとするが如きは、大海の水を柄杓で汲み干さんとするより外の何ものでもないと嘲笑する。よしや日蓮の念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊の呼號は、革命的熱血のの迸り出でたるものに過ぎずとするも、先きに教相判釋の項に述べた様に、各宗派が皆自宗第一佛説呼はり爲すことは、少しく冷靜に考へると、如何にも宗教本性にふさはしくなく、強く云へば矛盾して居ると云つても差支へないやうに思はれる。重ねて例せば、禪宗などは其教説する所、頗る能く儒教と相一致して居る。子思曰く天命、之れを性と謂ふ。性に率ふ、之れを道と謂ふ。道を修むる、之れを教と謂ふ。道は須臾も離る可からず。離る可きは道に非ざるなり。

此は中庸開卷第一に、子思の唱破せる所。天道は即ち人道にして、人道は即ち天道、子思は之れを名づけて誠と云ふ。則ち誠は天の道で、之れを誠にするは人の道である。豈、嘗に天地の道、誠にして人の本性も誠なるのみならんや。萬物の本性も皆誠である。鳶飛んで天に沖し、魚躍つて淵に入るも誠の發現である。日月星辰の運行より、春夏秋冬の變化も、皆誠の發現ならざるなく、誠は物の始終にして誠ならざるものは無い。故に誠は天人合一、物我一如の樞機である。

又曰く、喜怒哀樂の未だ發せざる之れを中と謂ふ。發して皆節に中る。之れを和と謂ふ。中は天下の大本なり。和は天下の達徳なり。中和を致せば天地位する焉。萬物育する焉。

孟子曰く、我れ善く吾が浩然の氣を養ふ。其氣たるや、至大至剛、直を以て養ふて害することなげれば、則ち天地の間に塞つ。其氣たるや、義と道とに配す。是れなければ餓うるなり。

王陽明云く、耳目見聞は外賊なり。情慾意識は内賊なり。只是れ主人、惺々不昧、中房に獨座する時は、賊即ち化して家人となる。

此等の言を玩味すれば、禪僧の言ふ所と酷似するものあり。さればこそ、宋代に至り、禪宗の支那に盛んなるや、禪僧と儒者との往來甚だ繁くして、其言行互に合致せるの趣、眞に掬す可し。中にも宋儒の主一居散を説けるあたりは、禪僧の悟道と、靈犀眞に相通するの感深し。

然るに同じ佛徒でありながら、一方眞言宗の儒教を見るや頗る輕し。弘法の縦の教相判釋たる十住心論を見ると、儒教は第二住心とせられて居る。則ち十階級ある中の僅に第二の階級に置かれて居る。其待遇禪宗に於けると大差を見るのである。同じ佛教には屬しながらも秘密教と呼ばれ、靈界神秘性に富める眞言宗では全然現世的にして、毫も神秘性を有せざる儒教を最も下位に置いたのは、當然の歸結とも云へやう。

若しそれ、自力宗と他力宗とを對立する時は、其性質、其行路餘りに相異なり、之れが釋尊と云ふ同一宗祖より説かれたものとは、殆んど受取りがたき感深し。之れが爲めに前にも云つたやうに、淨

土教非佛説さへも出て居る程である。

宗論はどちら負けても釋迦の耻

と川柳子が皮肉つたが、其宗論の絶えないのが宗教の曖昧性を裏書きして居ると見るは如何に。

言ふ迄もなく、基督教でも之れを大別すると新教、舊教、希臘教の三種となり、希臘教では舊露西亞の如く、政教二大權を皇帝が獨占する。所が此事は新舊基督教の共に強く反對せる所であつて、新舊基督教は共に「神のものは神に、ケーザルのものはケーザルに」と云ふ信仰の下に政教分離を強調する。此爲めには屢々血を流しさへした。所が此點に一致せる新教と舊教とは、ニカイヤ會議の決議信條問題では全然反對の立場を固守し、ルーテル一たび立つてより、之れを口實に幾度戰爭があり、幾十萬の人を犠牲にせるか數へられぬ。血を流すことを最悪と絶叫せる基督教が、世界の宗教中最も流血の慘を繰り返へすことの多大なりしことは、全く笑へぬ皮肉ではないか。そして斯かる慘事は結局宗論から來るので、宗論の絶えないのはとりも直さず、宗教の曖昧性を曝露する外の何ものでもない。尙、基督教も佛教と同じやうに三大教の外、幾多の小派に分岐して些細な信條、形式の差から相互に對峙して相争つて居ることは云ふ迄もない。尙、少しく進んで述べて見やう。

一方に天上天下唯我獨尊と大悟した釋迦は、バラモン輩に對しては無我説を立て、居る。佛敎者に

云はしむれば、同じ我でも其意味が異なると辨明するが、然し、曖昧な事には違ひない。諸法流轉、因縁和合を説く所よりすれば、無我説を探るが當然と受取れるが、一面、釋迦五十年の出家生活の動機を察すれば、現世限りの假我の執着を解脱するのみが目的であつたとしては、餘りに手段倒れになつてしまふではないか。此點より考へると、我の永久性が基礎を成して居ると云ふ方が妥當なやうに感ぜられる。

基督は一方に於て「此世及此世のものを愛する勿れ、此世及此世のものを愛すれば、神を愛するの心何れにありや」とか「若し汝の眼、汝を礙かさば、取りて捨てよ、兩眼ありて地獄の火に投げ入れられんよりは、片眼にて生に入るは幸なり」とか、非現世本位の言説がバイブルの至る所に並べられて居るかを見ると、一方には信者から「天國は何れにありや」と尋ねられて「天國は汝等の衷にあり」と答へて、天國を現世的、主觀的のものゝやうに想はしめる。バイブルを精讀して行くと、是れが同一人から述べられたのであらうかと、疑はれるやうな矛盾撞着が到る所に發見せられる。

釋迦も自ら筆を執らなかつた。イエスも自ら書かなかつた。佛經も聖書も、弟子共の後に結集せる所たること相同じ。其所説に矛盾撞着あるが如く見えたり、少くとも同一人の言説とは想へぬやうな異説が盛られて居るのは、釋迦、イエスが共に自ら執筆せなかつたためであらうか。さるにても、論

語も孔子自身の執筆では無い。固より釋迦及イエスと異なり、孔子は春秋を著したり、易の十翼を書いたりして居るから、他の二聖のやうに著述が無いのではないが、然し、論語は自著ではなく、弟子共の輯録せるものである。孔子が十哲初め所謂三千の弟子共を相手の言行を、後になつて輯録したものである。此點佛經及バイブルと同一の性質の書である。然るに我々は論語を讀んで見れば殆んど矛盾撞着などを感じないのみならず、異説を發見することも無い。全篇悉く孔子の主義主張の一貫せることを觀、孔子の態度、情味が全篇に溢れて居ることを感ずる。固より孔子も釋迦と同じやうに、人を見て法を説く、教育家的タイプであつたから、同じ仁を説き、同じ孝を諭しても、弟子の性質なり、修養程度なり又其境遇なりに應じて説き方を異にしては居るが、然し、其れは仁とか孝とかの徳の含蓄せる所の内容を、弟子毎に適切な風に説諭したものであるから、説き方は色々相異なつて居ても、何等の矛盾撞着を感ずることなく、其全体を綜括することが出来る。そこに釋迦の佛經、イエスのバイブルに見るやうな曖昧の感は起らない。

此の如く、最も差別性特殊相の多かる可き道徳よりも、最も平等性、普遍相の多かる可き宗教の方が却つて正反に差別的、排他性の多きは何の故であらうか。宗教は道徳よりも一層感情性に富むからであらうか。それも一理なきに非ざるも、然し、此の如きは一附屬理由に過ぎない。それよりも私は

宗○教○の○大○前○提○で○あ○る○所○の○未○來○世○界○、○靈○界○の○存○否○並○に○其○性○質○の○曖○昧○な○こ○と○が○、○宗○教○の○所○説○並○び○に○態○度○の○千○差○萬○別○を○誘○致○す○る○も○の○で○あ○る○と○思○ふ○。

人類中の最高峰と云はれ、最も理性の發達したカントすらも、純粹理性の批判のみに安立するを得ないで、實踐理性の批判に於て、自由意志や靈魂不滅を肯定して居る。ソクラテス然り、プラトン亦然りと云ふ程であるから、普通の人間が現實地上世界の道德生活のみに安立するを得ざるは止むなきことで、其處に道德を超越せる靈界とか、未來世とか云ふものを本場とせる宗教の起原がある譯ではあるが、其肝心の靈界の性質、未來世の存否と云ふことが曖昧不定である爲めに、之れに到達せんとする手段方法、即ち宗教的修養も千差萬別となるのであらう。未來靈界なるもの、存在すること無ければ止む。若し是れありとすれば、假りに基督教を眞宗教であるとせば、基督教は其信者のみを有利に審判して、天國に送り、佛教信者を始め他の宗教信者は悉く不利の審判を受けて、地獄に送られることになる。現にダンテの神曲を見るとソクラテスやプラトンなどでも、極めて下位の天界に置かれて居る。總じてキリストの出現以前の者は如何なる大徳家でも、如何なる大哲學者でも、凡て基督教の信者の如何に下等なる人物よりも下位に配置されて居る。ダンテの空想に過ぎないと一笑に附してしまへば其れ迄の話ではあるが、然し、ダンテが謹嚴なる信者であつただけに、私は笑へぬ謎とも

皮肉とも想ふのである。佛教者に言はしめたら、また、之れと正反對に判決するのは云ふ迄もないが佛、耶兩教が全然其立場を異にするものである以上、我々は板挟みの破目に置かれて居ることになる。このやうな事を考へるのは、如何にも閑人の閑つぶしと、一面滑稽にすら感ぜられもするが、然し、少しく論理的に考へたら、決して滑稽で無い事が首肯される。

宗教の信仰の無いものは、兎角人物が上すべりである。世道人心を淳厚にするには必ず宗教の信仰を篤くせねばならぬ。今日の教育が徹底せずして徒らた智育のみに偏するは、宗教の要素を缺く爲めであるとは、爲政家、教育家を初め、世の有識階級の凡ての歎息である。そして其歎息は何等不合理な點は無いのである。不合理でない、最も經世的肝要事であれば、爲政家、教育家を初め有識階級のものは、力を盡して宗教教育を爲さねばならず、尙其前に夫子自ら御互に宗教的信仰に入らねばならぬが、さて、佛教にするか、基督教にするか、何れに入つても前に云つたやうに、板挟みの破目に陥る覺悟を爲さねばならぬ。そして一つ間違つたら、信仰に入つたことが寧ろ、不利となつて未來世界ではとり返へしのつかぬ結果に陥らねばならぬ。宗教の信仰に入ることとは、誠に危険千萬とも想へる。世人はよく何でもよい、信仰に入りさへすればよいのである。信仰の無い生活がいかないので

ある。佛教だらうが、基督教だらうが、何でもよいと云ふ。勿論現世的の立場のみから見れば、信仰人は教の種類を問はず、其人物が篤實であるものが多いから、信仰人を歓迎してよいが、然し深く考へれば、此は甚だ宗教を馬鹿にした話で、此の如きは爲政家が、宗教を政策に利用するに外ならないではないか。我々が宗教を信仰せんとする所以のものは、之れに依つて救済されんが爲めである。其救済は現世に於てと云ふよりは未來本位のものである。若しも現世の救済のみならば、道德的修養で事足りる筈である。それでは權威が無いから、宗教を借りるのだと云ふかも知れぬが、其様な生やさしい、小供だまし見たやうな動機で、何としても眞の宗教的信仰が湧起しやうぞ。何等の批判力の無い愚夫愚婦ならば知らず、今日のインテリは決してそんな小供だましに乗るものではない。其證據に爲政者などが宗教々々と叫びながら、夫子それ自身に信仰のあるものは殆んど無いではないか。我々は爲政者だから、政策に用ふるのだと云うのか。それは民を愚にして之れを治める主義を採つた徳川時代ならば通用もしやうが、日本國中津々浦々迄に、教育の徹底を計つて居る昭和の聖代には、全く通用し兼ねる。抑、教育の目的は那邊にあるか、智育は其一大方面である。事實今日迄は智育偏重が日本の教育の實相である。智育の第一の能事は、判断の明晰である。批判力の養成である。一方に批判力を養成しながら、宗教の信仰のみは、國を治め身を修める方便だから、批判なくして信仰せよと

云ふ。何でもよいから信仰しよへすればよいと云ふ。何たる人を馬鹿にした話だ。今日のインテリは爲政家や教育者と、其教育に等差は無いのである。小供だましいに乗らう筈が無いではないか。予は徒らに宗教の必要呼はりのみに憂き身をやつして居る、爲政家や教育家の如何にも認識不足なことを歎ぜざるを得ないのである。

さて、宗教にかゝる曖昧性の濃厚なるものから、欺瞞的な似て非なる宗教、若くは宗教類似のものが世の中に簇出蔓延し易い。皮相的に見れば如何なる宗教も、勸善懲罪を標榜せないものは無いやうに想はれるから、何等かの意味で社會に効果を及ぼして居ると想はねばならぬが、然し、能く其内情を探知し、能く信者の集る所以を観察する時は、必ずしも世道人心に裨益を與へて居るとは云へない。されば識者は克く一般民衆を指導誘掖せねばならぬ。

私は宗教の人間界に至大の關係あることを信するが故に、一國政府が一省内に 宗教局を置いて、僅に宗教の形式的取締りを爲すに過ぎざる現状に不満を感じる一人である。之れと同時に私は、帝國大學内には心靈研究所を設置して、文學者、理學者、醫學者、其他あらゆる學者を網羅して綜合的に心靈研究を爲す可きものであると思ふ。人生問題に至大の關係あるが如く見ゆる此心靈現象を、全然民間好事の人々のみ托して顧みざるが如きは、甚だ不合理の事と思ふ。千里眼とか、靈媒とか、色々な

靈能者が屢各地に現はれはするが、常に之れが一部民間好事の人にのみ玩ばれ、其不完全にして抜け目の多い、觀察實驗の結果が、誇張して世に傳へられると云ふ現狀は、決して世道人心の爲めになるとは云はれまい。學者の研究と云ふものが、常に同一軌道の上のみを行くは面白からず。世には人生との關係、比較的間接的であると想はるゝ事項にも、多額の研究費を投じて居る。然るに其れよりも直接間接に人生との關係密切と想はるゝ心靈研究に、十分なる研究機關を設置しないと云ふことは、文明時代の一大缺陷では無からうか。かゝる根本缺陷を有しながら、宗教々育を盛んにして、教育の効果を擧げんとするが如きは、想はざるの甚だしきものではなからうか。

要するに私は、宗教の本質は、未來靈界の存否、個靈の滅否と離る可からざる關係を有するものであると信するものから、苟も宗教々育を盛にし、苟も信仰心を起して世道人心を淳厚ならしめんと欲するならば、あらゆる手段を盡し、研究を重ねて、此根本問題を明瞭にせねばならぬと思ふ。此根本問題を徹底せぬ所から、宗教の曖昧性を生じ、世道人心を淳厚ならしむ可き宗教が、却つて不安の種を蒔き、其結果は似て非なる瞞欺的宗教が、人間の弱點を悪用して、却つて或は科學を貶したり、或は射倖心を煽つたり、或は各種の迷信を起させたりするのである。繰り返へして云ふ、私は宗教は、我々の安心立命の根本要素であり、社會國家の最高文化であるから、其宗教の根本問題に就いては、

政府も民間も總掛りで徹底的に究明せねばならぬと信す。

功利主義よりすれば、自利と利他とは結果に依つて分ち、義務主義より云へば、自利、利他は動機の如何に依つて判別する。其何れよりするも、彼の自然主義者のやうな冷酷に徹底的態度を以て、犀利に之れを解剖すれば、眞の利他なるもの殆んど残る無く、利他と見ゆるものも凡て隠れたる自利ならざるなしと云ふことになる。たとへ聖賢の行爲と雖も、其れが現實の人間の行爲である以上は、自利の微影をも發見する能はざるものは、殆んど之れ無かる可し。固より其現はれの上より觀察すれば大小高下、幾十等の價值表が作れるであらう。匹夫と聖賢との間には幾階段が隔てられるであらう。然したとへ聖賢の行爲と雖も、全然利他とのみ解することは出来ないであらう。果して然らば、人間の自我中心の事實は、餘りにも根強いものであることを痛切に感ぜざるを得ないであらう。其れが宿業であるか、迷妄であるか、私は知らない。私は唯之れを古往今來、人生の事實と信するのみである。

昔者、人智の批判力に乏しかつた時代には、何等の躊躇なく此自我を未來世に迄延長して、現世の言行は未來世への因縁となると想へるものから、傳統的の道德は疑惑するものなく、社會に實行せられたのであるが、今日のやうに、人智大いに發達し、批判力の多くなつた時代に於ては、個我は固守しながらも、その未來世への延長は、昔の人々のやうに、無批判には爲し得ない。そこで、現世道

徳を未來世へ因縁づけることも、非常に弱くなり、中には全く人生の行爲は萬事現世のみで解決するもの、また、現世のみで解決するの外なきものと想ふ所よりして、道德其ものゝ威重が、自然に減少し、世は擧て現世的快樂に走るやうになつて來た。倫理學の研究は精深を致し、道德の談議は巧妙になつたが、さて其實行力如何と見ると、全く正反對で、有りやうは現代の人々の道德に對する態度は、御都合主義であり、お天氣次第であり、僅に社會の非難を恐れ、知人の信用を害すまいとして、其行動を慎むに過ぎざるもの、比々皆然りと云ふ有様で、自己の利害得失のみ、顧慮することに急なるのみで、道德の嚴肅なる權威の認められぬ感甚だ深し。

道德の主義としては、功利教や、義務説よりも、人格主義の方が合理的である。則ち我々は、人格を完成する爲めに行爲す可きもので、行爲の善悪は、それが人格を完成するに役立つか、將、障害となるかに依つて判定す可きものであると云ふのである。功利教のやうに、最大多數の最大幸福を標準としたり、義務説のやうに、義務は義務なるが故に、之れを守らざる可からずなど云ふよりは、人格主義の方が含蓄豊富で、善惡の標準としては合理的に思へる。

さるにても、何故に人格を其れ程尊重せねばならぬか、三寸息絶ゆれば、解消されねばならぬ人格を、何故に生涯發達して行かねばならぬか。先天的に聖賢型の人々か、文字通り高潔型の人物ならば

知らず、一般人にあつては其根據鞏固なる能はず、信念と云ふ所迄は中々に至りがたい。然るに若し現世に於ける人格の完成は、必ず未來世への連続となる。其未來世は現世のやうな、人生七十古來稀なるものではなく、永久的のものであると云ふことになれば、こゝに人格完成の努力は非常な熱心と呼ぶことになるであらう。

要するに私は、現世的の道德のみでは、何としても其實行を誘導する力の薄弱なことを覺えるので此點から道德の背後には宗教の必要があると思はれる。そして此爲めに必要な宗教は、前來幾度か繰り返へした個我の不滅を前提とするものであることが最も適切である。個我の宗教的研究の肝要さは私は言葉に盡せぬと思ふ。

固より私は、一切萬事現世解消とし、未來世などに關係なく、現世を現世のみと見ても、道德が立たぬと云ふのでは無い。三途の河渡り用として、棺桶の中には六道錢の必要あるのみなるにも不拘、現世にのみしか役立たない、金錢財寶を今はの極迄あきらめることの出來ぬ因業な爺が、世の中に澤山ある所から推して、己が事業の爲めに終生を捧げ盡すことも出来るのは當然であつて、孔子の「朝に道を聽いて、夕に死すとも可なり」の述懐を現世的にのみ解することも、不可能とは思はぬが、唯最大多數の人間に對しては、一切萬事現世解消とあつては、何としても道德の實行が力弱いと信ずるのである。

第九章 宗教と治病致福

第一節 「生長の家」の治病致福の主張

多くの宗教は其初期に於いては、治病致福で信仰に引き入れる。天理教然り、金光教然り、新興の「ひとのみち教團」さては「生長の家」皆然り。人間の有する多種多様の慾望中、生命慾は最深最強のもので、此生命慾を脅かすものが疾病であるから、治病が人間の大關心事たるは當然のことで、之れを誘引として宗教に導くは、極めて有力な方策である。また此生命慾に次では、富貴慾は人生を達観した人物を除いては、百人が百人、千人が千人、最も捕へられ易い所のものであるから、是れまた宗教の誘引に利用せらるゝことの多きは當然過ぎる。依つて私はこゝに此問題に就いて、能ふ限り合理的に考察して見やうと思ふ。其考察は古今あらゆる宗教又は教團に共通的になされ得ると想ふが、新興の「生長の家」教團を中心に、之れを試みることに便宜である上に、興味も多く感ぜられる。然り私が宗教と治病致福に就いて考察するに當り「生長の家」教團を採ることにしたのは、同教團は主唱者谷口雅春氏が、非常なる健筆家で、續々同氏の所謂聖典の出版をなし、毎日のやうに盛んに新聞廣告

をなして居るから、其主唱が極めて明白なから、論辯上には大なる便宜があるからである。無論同氏の所説の批評は、古今の同種類の宗教々團に對する批評ともなる譯である。私は谷口氏ともまた「生長の家」教團とも、何等私的關係あるものではないが、古來多くの宗教々團には治病致福が附きものゝやうになつて居るので、之れに對する卑見を述べて、私の宗教觀を明かにせんとした迄である。

谷口氏は夙に雜誌「生長の家」を發刊して居る上に、「生命の實相」全集として、毎卷數百頁の著書を公刊して盛んに賣出して居られる。私は其凡てを通讀した譯ではないが、二、三冊を誦破して、

氏の所論は大要左の如きものであらうと思ふ。
我々人間は皆神の子である。全智全能、完全圓滿なる神の子である。神の子である以上人間も完全なものであらねばならぬ。完全な神の子人間に、不幸、疾病などがあらう筈がない。不幸、疾病などは皆念の迷ひから生じる影であつて、實在のものではない。實在するものは神の子たる靈のみであつて、肉体の如きも靈が念に依つて作り出したものに過ぎずして、實在ではなく一種の影像に過ぎない。肉体が已に一種の影像に過ぎないのであるから、此肉体に起る疾病なるものが、實在しやう筈なく、全く念の作り出した迷ひの影に過ぎない。已に疾病は迷ひで、實體がないのだから、其迷ひの影を映出して居る源の念を是正しさえすれば、治病は其必然の結果であらねばならぬ。本來

無いものを在ると迷ふて居るのだから、其迷ひを除去しきへすれば、治病するのに何の不思議もない。だから治病せんと欲するものは先づ、自分は神の子である、本来完全のものである。疾病に罹つて居るなど想つて居るのは念の迷ひである。自分は決して病氣などに罹る筈のものではないと、信じきへすれば、本来無いものを無いと観るのだから、病氣は當然治つてしまふ。不幸、災害もまた之れと同じである。神の子に不幸、災害があり得やう筈がない。それを在るやうに想ふて苦むのは、念の迷ひからである。苟も正念しきへすれば、影であつて實在でない所の不幸災害が神の子たる我々を見舞う筈がない。所で、正念は「正長の家」に關する書物を読むだけでも得られるが、生長の家の指導に従ひ、神想觀を行ふことが最も適切な方法である。神想觀を行つて正念しきへすれば、常に病氣が治るとか、不幸、災害を免れるとか云ふやうな消極的の効驗が著しいのみならず、積極的にあらゆる希望が遂げられ、富貴繁昌期して待つ可し。其は人事萬般、念に依つて映出せられるものであるからである。尙、念は常に人事を左右するのみならず、自然界の現象をも自己に有利に導く。正念せるものには劍難、水難、火難なきのみならず、砲彈の難すら免れた實例がある。快川禪師が「安禪は必ずしも山水を用ひず、心頭を滅すれば火もまた寒し」と豪語しながら、灰燼となつたのは、正念が足りなかつたのである。正念しきへすれば、火に焼かれると云ふことは有り得ない。

い。神の子だから火に焼かれるやうなことは有り得やう筈がない。焼かれると想ふから焼かれるのである。焼かれると云ふ念しきへ無ければ、焼かれるものでない。砲彈が當りはすまいかと恐れるから、之れに打たれて死傷するのである。砲彈は自分には當らないと念じて居れば當るものでない。其は砲彈其ものが、實は實在のものではなく、念の迷ひに依つて現はれた映像に過ぎないからである。

尤も、念には時間的及空間的の集積がある。祖先傳來の集積は念の時間的集積である。現在自分に關係を有する多くの人々から來るものは、念の空間的集積である。此時間的及空間的の念の集積は念波となつて、我々の吉凶禍福を映出する。故に自分に生起せる吉凶、禍福は、現在の自分の念だけで作り出すものでない。祖先累積の念波、關係者集積の念波、此等あらゆる念波の合作に成るものが、我々の吉凶禍福である。積善の家に餘慶あるは、祖先の念波の光明に依る。人を泣かし人を苦しめ、怨みに燃える敵の多い者に、凶禍の來るも同じ道理である。

無論、自分の現在に作成しつゝある念波は、最も力強く、自分の吉凶、禍福に影響する。それは顯在的精神作用のみならず、我々には潜在意識と云ふものがある。此顯在意識と潜在意識とが合致する場合は、念の功驗顯著であるが、時には其れが互に相反對することもある。顯在意識では一日

も早く病氣が治ればよいと望んで居りながら、潜在意識では何かの事情で、之れを望んで居ないやうなことがある。かゝる際には病氣が治らない。其上早く治ればよいと望んで居る、顯在意識の内容に、治らなかつたら困る、若しか致命的の疾病になりはせぬか等と、恐怖心が加はると、其治療は一層困難になる。世の多くの病人は自然に病氣になつたと云ふよりは、自ら病氣を醸成して居るものが普通である。其上今日の醫者は治病するよりは、寧ろ病氣の製造に拍車をかけて居る。病人は兎角神経過敏になつて居るものであるに不拘、頻りに其惡果を恐れしめ、やれ、絶對安靜をせねばならぬとか、やれ、出血したら大變だとか、食物は流動体に限るとか云ひきかせて、患者の心を病氣に集中せしめ、彌が上に心配させたり、恐怖せしめたりするから、念波は迷ひにのみ傾いて流れる。之れと並んで日々の新聞紙上に現はれる賣藥廣告などは、民衆の病氣を大量製産する外の何ものでもない。宜なるかな、醫藥彌盛んにして、病人彌増加すること。世には病氣と云ふものが無いと同時に、藥とか毒とか云ふものもない筈である。某藥が某種の病氣に特效があると云ふのは某藥の占有する特效ではなく、特效があると多くの人々が信ずるから、其念波で効能が顯著になるのである。毒藥もまた然り、某種のものは毒藥であると、昔から言ひ傳へ聞き傳へ、有毒の念波累積して居るから、毒になるのである。苟くも正念せるものには毒物あるな

し。正念せるものに於いては何を食ひ、何を飲まうとも毒となることは無い。赤痢菌でもチブス菌でも正念者を侵すものではない。之れと同じく食物でも何を食ひ何を飲まうと意のまゝでよい。榮養價値の問題の如きは末の末である。醫藥必ずしも廢す可しとは云はざるも、醫藥に依頼し醫藥に依つて治療せんと欲することは、本來無い筈の病氣の存在を肯定し、之れが爲めに正念を妨ぐることになる。故に正念を堅持する爲めには醫藥を放棄するがよい。

醫師は須らく、病人の尊信を受くる心醫たる可し。心醫とは何ぞ、藥石に依つて治療せんとせず患者の精神を導いて、病氣の當然治癒するものなることを信ぜしむるものである。苟くも患者の信用だに確固たらば、例へ水を與へて藥だと云つても、治療の功驗はある。世には凡ての病氣を先天性の梅毒に歸し、梅毒治療劑の一本鎗にて、多くの病人を治癒せる人あり、又萬病は眼病に歸一するものとして、眼病治療の一本鎗で、多くの患者を取扱へるものもある。此等は要するに藥石が病氣を治すのではなく、醫師の此方法此藥劑は、萬病を治すと信する念力の作用に因ることを示すものである。

正念は常に自分の病氣を治し、自分の災厄を拂ひ除けるのみならず、頑是なく未だ菽麥を辯ずる能

はざる小供に對しても、其親の念波は働きかけるものである。或る誌友（生長の家の雜誌購讀信仰せる人）は、其の愛子が疫痢に罹り、命旦夕に迫つた時、一心に「汝疫痢の細菌よ、汝も生物なれば、生命を惜むる可し、我も我子の生命を惜む、願くば互に其生命を重んじ、他を害することなからんを」と細菌に妥協を申し込んだら、急に愛子の病氣が治つた。之れと反對の例に、嫁の病氣の全快を好まない姑の念波で、治る可き嫁の病氣が何時までも治らず、然るに一朝姑の念波好轉するや、嫁の病氣は直に治つた者もある。

要するに我々は神想觀に依り、先以て己れの神の子なることを觀念し、神の子は完全なるもので、疾病、災害などに惑はさる可きでない、偏に正念を凝らして、無明より來る妄念妄想を拂拭すれば常に、現在の疾病を治し、災害を除き得るのみならず、此正念よりする念波に依り宿業も淨化せられ、怨敵より來る念波や、社會惡より來る念波も撃退することを得て、こゝに現世に於いては明朗なる生活を營み、時移り星變つて神の召命に依つて、此世を去れば靈界無限の榮光に浴す可し。

第二節 人間神子論に就ての批判

以上は私が生長の家に關する書物を読んで、記憶に残つた一端である。谷口氏の講義を其まゝに引

用したら一層判明になるとも思ふが、それは可なり多くの部分を抜摘せねばならぬので、便宜上私は氏の講義の要點を右の如く纏めて見たのである。

私は谷口氏の講演や説示を直接に聞いたことは無いが、單に書物を読んだ上から云つても、氏の所説の人を引きつける力の強いことを感じた。批評眼の少い人物や、單純な心の持主や、さては治療に過敏になつて居る病人などに對しては、異常の信用を博し、功驗を奏することある可きを想ふ。故に之れを宗教的の書物と見ないで、一個の修養の書物と見ても、教訓上の含蓄甚だ多きを喜ぶ。

とは云へ私は、氏の所説に對し幾多の疑義を懷くものである。依つて私は左に氏の所説に對して疑義を提出し、論評を試むると同時に、一般の宗教と治病の問題を取扱つて見たいと思ふ。

谷口氏の講説を読んで、先第一に氣付くことは、氏の念力論は福來博士の「心靈と神秘世界」の大著中に論ぜられて居る念力論と殆んど其軌を一にせることである。唯福來博士はどこ迄も學者的態度を採つて、其議論を宗教哲學方面に限定して居るが、谷口氏は非常に之れを廣範圍に應用して、治病致福其他、人事自然のあらゆる方面に及ぼして居るの差はあるものゝ、念力の原則論の方面に於ては全く同じきものである。

其は兎も角も、谷口氏は我々人間は皆神の子である。神の子なるが故に、完全である。随つて病氣

なごのある可き筈がない。病氣や災害は念の迷ひから生じた映像に過ぎないと云ふ。然らば問はん、念はなぜに迷ふのであるか、念が迷ひさへせぬば、靈の束縛となり、重荷となるやうな肉体を生じたり、随つて病氣に罹つたりちるやうなことは無い筈ではないか、我々の念が迷ふのは宿業に由ると云ふのか、然し我々が神の子ならば、我々の祖先も神の子ではないか、其等しく神の子なる祖先の靈の働きたる念が、何故に迷ふて宿業を作るやうになつたか、祖先も我々も皆神の子で完全なものであると云ふならば、迷ふて邪道に陥るやうな危険な念を成さう筈がないではないか。然るに事實宿業に依て、人間は生れながらこんな暗い影を負ふて居る。現在に於ても身体ありと執着し、病氣に罹つたと惱んで居る。此事實を何と辯明するか。谷口氏は、迷は影であつて實在せるものでない。恰も光の無い所が影であり、光が輝けば影は消える。光は積極的存在であるが、影は消極的存在であるからである。と云ふ。禪僧の公案にも

心は無きものなり

無きものになに迷ふらん

八風吹けども動ぜず天邊の月

と云ふのがあつた様に記憶するが、谷口氏の説明は之れに似て居る。如何にも念が正しくなり、念の

光明が輝けば、迷の影は消えやう。然し、靈が正念せずして迷ふことのあると云ふ事實を打ち消すことは出来まい。現に谷口氏は口癖のやうに、念の迷ひと云ふことを云つて居る。果して念の迷ふと云ふ事實を打ち消すことが出来ぬとあらば、迷ふ念の持主である人間を神の子なり、完全の者なりと斷ずることは出来ぬではないか。影は實在せず、光の無い所が影であると云ふ、如何にもそれに違ひない。然し、影を生ずる消極的の性質が光に在ると云ふことは云へるではないか、光が無限のものであるならば、影の生ずる譯はない。然るに光が有限である爲めか、光の及ばぬ所あり、光の他物に遮止せらるゝより影を生ずるのであつて見れば、影を生ずる性質が光にあると云はねばならぬ。否、光をして有限ならしめ、光を遮止するものは光其ものでは無いから、影を生ずる所以を光の性質に歸することは出来ぬと云ふのか、然る時は、光の外に光をして有限ならしめ、光を遮止して影を生ぜしむるものを他に求めねばならなくなる。此論法で念の迷ひを論ずれば、念は本來迷ふ筈ではないが、念の迷ひを惹起するものがあつて、念の本性を發揮せしめぬやうにするのであると云ふ推論になる。然る時は正念を妨遮するサムシングを肯定することになり、遂に二元論に陥るつて、谷口氏の極論せる唯心論は成立しなくなる。

要するに念の迷ひを説かなければ、肉体の成立や病氣の由來が説けなくなるし、さりとて、念に迷

ひを起す性質ありとする時は、妄念妄想を起すやうな念は、不完全の念であり、不完全を有する靈もまた不完全な靈となり、其不完全の靈を有する人間も、不完全な人間となり、かくして人間は神の子なるが故に、本來完全なりと云ふ谷口氏立論の第一前提が、論理上成立しなくなり、随つて此第一前提より演繹し來る身体觀や疾病觀の基礎に動搖異變を來たすことになる。此點に就ては、氏の多くの著書の中、殆んど説明を試みて居ない。少し之れに觸れた質問にでも會ふと、其れを巧みに避けて居る。

佛教に於いても人間に佛性ありと説く。然し、其佛性は完全に現在の我々に現はれて居ると云ふのではない。轉迷開悟して始めて佛性は現はれるのであると云ふのである。則ち佛教では、完全なる佛性が始めから我々に具はつて居ると云ふのではない。現前の人間は未だ佛性は隠れて、徒らに執着し煩惱する者であるとするのである。此點谷口氏の立論と順序が逆である。谷口氏は始めに人間は神の子で、完全なものであると云ふことを前提に持出して居る。そこで念の迷ひの出所に窺するのである。佛教では決して始めに完全佛性を持ち出さない。四諦十二因縁の理を悟り、八正道を修して然る後に、完成佛性を得るとする。佛性を説く點は同じであるが、立論の順序は反對である。然し谷口氏の方は、人間は神の子で、完全なものだと念せしむることに依つて、病氣治癒をしやうと云ふのだか

ら、彼れが如き立論となり、彼れが如きデレンマに陥るもまた止むを得ないことであらう。

第三節 唯心論に付ての批判

次に谷口氏は、其立論の基礎を唯心論に置いて居ることは云ふ迄もないが、氏の唯心論は普通哲學者や宗教家の唱ふる所のものよりは遙に積極的である。普通の唯心論は、宇宙の森羅萬象は如是我觀の範圍を出でないものであると云ふに止まり、心が物質に働きかけて、之を左右すると云ふ積極的能動的方面に就いて殆んど觸れて居ない。佛教などでも萬法唯一心、心外無別法と觀するのみで……森羅萬象は因縁所生で、假のものであり、空のものであるから、之を實有と思ふて執着してはならぬと云ふのみであつて、積極的に心が物質に働きかけて、之れを左右し變更すると迄は説かない。消極的に無質に左右せられないやうに警戒するに過ぎない。勿論神通を説く所などを見ると、心の物界を支配する積極的方面も認められないことはないが、元來神通力を有するものは、特異な天才で普通人の思想が物界を左右すると云ふが如きは之を説かない。一休の「傀儡師首に掛けたる玉手箱佛出さうと鬼出さうと」の程度で、心の持ち様で人間界の幸不幸、悲喜劇が演ぜられると云ふやうに説く位である。プラトーンのイデア論にしても、其態度は佛教と似て居る。随つて普通の唯心論を唱へるものは

心に依つて肉体の疾病を治療するとか、心に依つて經濟事情を左右するとか云ふやうなことまでは、深入りしないやうである。況んや心に依つて、自然現象を意の如くするなど云ふやうな、大袈裟なことを説くものは殆んど無い。然るに谷口氏は唯心論の積極的、應用的方面を力説して、念波に依つて疾病を治療するとか、念波に依つて經濟上の満足を得るとか、念力に依つて毒を化して薬とし、薬を化して毒とするとか、進んでは今日の醫學的の治療を有害無益と説き、科學の行きつまりを論じて居る。如何にも唯心論、唯靈論を極力擴充して行けば、谷口氏の態度になるのが一應は當然なことに想へる。宇宙の森羅萬象は心の映像であり、念の作出であるとする唯心論の立場から云へば、一步を進めて心の映像であり、念の作出である所の森羅萬象を、映出者であり、作出者である所の心が、其意のままに映出し直したり、念が其欲するまゝに改作したりすることも出来さうなものと想はれる。そこで迄行かなければ、唯心論や唯靈論は徹底したとは云へない。かく考へ來ると私は、谷口氏の徹底的態度に敬意を表したくなるが、然し、翻つて古今東西の唯心論者や、唯靈論者が殆んど揃ひも揃ふて谷口氏のやうに、積極的態度を採らなかつたのは、何故であらうかを考へて見ると、其れはそこ迄徹底したくも、事實不可能であつたからではあるまいか。徹底せんと欲せざるに非ざるも、能はざりしが爲めではあるまいか。唯心論者の立場よりすれば唯、物質は心の映像に過ぎないと消極的の論辯を

爲すに止めず、積極的に心のまゝに物質を左右することを得れば、其の所論の確實性を増すこと幾倍なるか分らないのだから、そこまで進みたいのは當然であらうが、事實不可能だから之れを避けたのであらうと想ふ。

元來、唯心論とか、唯靈論とか云ふものゝ哲學的論難は、措て論ぜずとして、極めて實際的に考察しても、前にも屢々述べたやうに、森羅萬象の創造は云ふ迄もなく、吾人の肉体の創造とを云ふ問題も、唯心論や唯靈論では、容易に人々を首肯せしめ得るものではない。森羅萬象は心の映像に過ぎないと聞かされても、物質の存在は餘りに頑固に我々に感ぜられる。肉体は念の作る所だと云はれても、肉体は餘りに明確に我々と密接に感ぜられる。尤も森羅萬象を如是實在と觀するのは間違ひで、如是我觀と觀するのが正當であると云ふ程の意味の唯心論は、誰にでも首肯せしめ得る。我々の心の作用は、感覺を基礎とし材料として居るもので、如何に高尚なる心作用でも、之れを分析し、還元し行くと、感覺に歸着する。生盲の畫く心作用には、全く色彩的要素を缺く。カナテコ聾の心作用には、全く音響的要素を缺く。さて其感覺は外界の刺戟に依つて起るものであるが、外界の刺戟は之れを物理的に見れば凡て運動に外ならぬ。我々の感覺には視覺あり、聽覺あり、味覺、嗅覺、皮膚覺など色々あつて、眼に見る色と、耳に聞く音とは、主觀的には全く相異なるもので、それは質

の相異で、決して單なる量の相異とは感ぜられない。味と云ひ、香と云ふ凡て皆質を異にするもので、強さ、即ち、量の増減で互に相代り得るものではない。しかし一方客觀的刺戟の方面より見れば、各種の感覺を起すものは、單に運動の速度の差に過ぎない。即ち質差は無く、量差のみである。想ふに外界には種々無限の速度の波動がある筈ではあるが、我々の感覺機關は、唯其中の或る速さの波動にのみ、斷片的に應じ得る組織を有して居るのみである。所で、振動の速さは、振動数の多少に依つて定まるものであるが、一秒間十回位迄の振動を起すものは、我々の皮膚を刺戟して觸覺を起す。大きなものが上からドスンと落下すると、我々は音響の外に何か腹に響くやうに感じる。それは觸覺の一種である。此觸覺で差別し得る振動数は極めて狭い範圍のもので、一秒間三十と三十五との差などは差別し得ない。所がそこへ行くと耳がある。鋭敏な耳は一秒間十二振動より五萬振動迄の差別が出来る。然し之れ以上になると、人間の耳では差別が出来なくなる。と云つて外界には、八萬、十萬、百萬と云ふやうに色々の振動がある筈であるが、何故か我々人間には、之れに應ずる感覺機關が具つて居ない。が其れがまた非常に多くなると、溫度の感覺を起す。即ち一秒間約三十億の振動が、皮膚を刺戟すると熱の感覺を生じる。此以上にまた、非常に大なるギャツプがあつて一秒間四百五十兆になると、眼の感覺的刺戟となつて、光及色の感覺を生ず。それがまた七百八十五兆以上になると、我

々の眼では差別が出来なくなり、そして我々人間は、何等之れに適應する機關を有せない。

右に依つて考へると、柳緑花紅も、黃鳥囀聲も、山海の珍珠も、さては貴婦人の頭髮を美化する香水の芳薰も、之れを物理的刺戟として見れば、何等種類の差あるに非ずして、量的運動の差に過ぎない。量的運動の差に過ぎないものに、質の種類を差を生ぜしむるものは、我々の感覺機關である。詳しくは量的差別のみの物理的運動を、特殊組織を有する感覺機關が媒介して、之れを腦中樞に傳達して、そこに始めて質的差を生ずるのである。故に宇宙の森羅萬象は感覺機關が作製して居ると云ふてよいので、感覺機關に異變があれば、森羅萬象も異様になる。全色盲者には花園の千紫萬紅は無く、灰色の花辨草木あるのみである。聾啞は卷の騒音もなければ、オーケストラの美響も無い。此は消極的の例であるが、進んで積極的に云へば、若し火星に住むと云ふ天人連中が、我々人間の有せざる種類の第六官、第七官と云ふやうな感覺機關を有して居て、其れが地球に天降つて來たならば、彼等の感ずる森羅萬象は、我々人間の感ずる所のものとは非常に相異なるものであらう。則ち彼等は、我々人間は直接感受することの出来ない空中充滿の電氣や、エーテルなども直接感じ得るかも知れない。其他我々の想像も出来ないやうなものゝ存在を感知するかも知れない。此は決して空想では無い。極

めて合理的な推測である。故に云ふ、森羅萬象は如是實在に非ずして如是我觀である。此種如是我觀の意味の唯心論ならば、何人も首肯せねばならぬ。素朴的宇宙觀を有する通俗人の思ふて居るやうに現に日夜我々の見聞するまゝの森羅萬象が、天上天下絶對不變に實在すると見ることの間違ひであると云ふ程の唯心論ならば、インテリならずとも、少しく物の道理を考へ得る者に對して、相當の理解を與へ得るであらう。

然るに若し此程度を越えて唯心論を極端に走せ、森羅萬象は心の映像に過ぎない、肉体が病氣に罹つたと想ふのは、念の迷ひに過ぎないと云ふ所まで推論して行くと、種々の矛盾が感ぜられて來る。議論が餘り廣汎に亘つて來ると、哲學論に走るやうになるから、以下は治病問題に限界して行論することにしやう。

第四節 心身の相關

心身は如實的には相關不離なもので、全く身体を游離した心と云ふやうなものは、心靈研究者などは之れを肯定するも、未だ學界の定説たる程、確實なものではなく、また全く心の無い身体と云ふものも、我々の身体と云ふ觀念には合はないものである。已に心身は相關不離のものであるから、一方

に刺戟を與ふれば必ず他方に影響する。一方に異變があれば他方にも之れに相當する異變がある。我々の病氣の場合も此原則に漏れまい。否、病氣の場合が最も相關不離の原則を如實に示すことは、我々の常に經驗する所である。故に肉體組織に故障が起つて、病的現象を生ずる場合には、精神作用にも多少の異變を生ずる。病氣に罹れば短氣になるとか、憂鬱になるとか、神經過敏になるとか、感覺に異常を生ずるとか、記憶が衰へるとか、判斷推理が鈍くなるとか、センチメンタルになるとか、意志が弱くなるとか、數へ來れば色々な精神的變化を見る。又之れと共に精神に不安憂慮があれば、血行遲緩となり、消化不良となり、食慾不振となり、呼吸力弱くなるなどの生理的變化を見るが、之れに反して、得意に躍るやうな時は、全く右と反對なる狀況を呈する。此道理を推して行く時は、病氣には物的醫學的治療法があれば、精神治療法もある可き筈になる。則ち、心身の關係を一元二面的のものとするならば、病氣も一元二面的である可き筈であるから、之れが治療を爲すに當つて醫學的治療の效能を認めると共に、精神治療なるものゝ効果も認めてよい筈である。此點から見て、從來の醫者の多くが餘りに物的治療のみ走つて、心的治療を顧みなかつたのは、如實的の心身關係を無視せるものと云はなければならぬ。想ふに、從來多くの醫師は餘りに人間を物的のみ見て、我々の身体を全く木石視するの弊が多い。普通個人經營の醫院のみならず、堂々たる大學の附屬病院を視察し

ても、そこには何等患者の精神を慰安するに足る消極的の設備すらも無い、ごらい極まるものが比々皆然りであるから、積極的に患者を精神的に治療する方法が講ぜられて居らう筈がない。此は餘りに物的治療に偏し、薬石の効能を過信するより來れるものであるが、少しく心身聯合作用の如何なるものなるかを考へるだけでも、今日の醫師病院のやり方は大いに改良せねばならぬことを發見するであらう。試みに左に聯合の主なる種類を列擧して然る後、私の論議を進めて行くことにしやう。

聯合には先づ、普通心理學で説く所の觀念聯合がある。此聯合には類似、接近、繼續及對比の四種あることは人々の熟知せる所であるから、其説明を畧することゝして、此外に尙色々な聯合の種類がある。

第一は感覺と智識作用との聯合である。前の英國自由黨の總理グラッドストーンは、嘗に政治家として、歴史に特筆大書さる可き大人物であつたのみならず、文學者としても一頭角を現はした人である。此人は自分の書齋に机を二つ置き、甲の机では政治上に關する事務を執り、乙の机では文學的の修養をなしたとの事であるが、時に甲の机で文學的の仕事をなし、乙の机で政治上の事務に當らうとしても、共に何だか思想作用が自然的にならなかつたと云ふ。是れは机の感覺と智的作用との聯合が甲乙机各相異なるからである。我々他人の机上では落ちついて仕事することの出來ないのも、之れと

同じ道理であらう。此他、神社の拜殿では神代史を考へるに都合がよいが、商賣上の取引を考へるには都合がよくないとか、高山の絶頂では宇宙の廣大無邊を觀するにはよいが、楊子で重箱の隅をせゝるやうな細かなケチなことを考へるには、ふさはしくないと云ふやうなことは、皆感覺と智的作用との聯合の然らしむる所であらう。

第二は、觀念より感覺を惹起することである。西洋樂の大家ベートーヴェンは、聾者となつても能く名曲を出した。英の詩聖ミルトンは、盲者となつても、能く風景詩の名篇を作つた。此等は觀念よりして聽覺、視覺を惹起せるものと云はねばならぬ。昔支那の某將軍は、行軍に際して水に窮し、兵士が頻りに渴を訴えた時に、青梅の話をして之れを醫したと云ふ事がある。何れ支那歴史家の誇張談であらうが、然し實際我々も、青梅の事を考へて居ると口に生水キミズが出る。又船暈に苦められた經驗のある人は、其追想をすると、多少船暈に似た實感が起る。特に婦人や小兒の神經過敏なるものは、所謂無形に見、無聲に聞くと云ふことが少くない。幽靈を見たとか、怪物に遇つたとか云ふのは、多く此類であらう。

第三は、觀念よりして生理作用に影響することである。世には想像妊娠と云ふことがある。即ち神經過敏な婦人が、何かの拍子に、自分は妊娠したのであるまいかと想ふと、實際上妊娠して居ないの

に、ツワリがして食物の好悪が異常になると云ふやうな、妊娠的生理作用を現はすやうになる。想像病氣なども之れと同じ道理で、自分はコレラ病に罹つたと思ふと、俄かに吐瀉を起すと云ふやうなことがある。催眠術的の暗示にかけると、普通の人も之れと類似の現象を呈する者であるから、其れを反對に利用して、病氣治療などを爲すのである。

第四は、感○覺○又○は○觀○念○よ○り○し○て○感○情○及○慾○望○を○惹○起○す○こ○と○で○あ○る○。嗜きな人は見ても想ひ出しても自然に愛情が起る。婦人や神経質の人は、初見參に自分の感觸を害した人に對しては、會ふても、想ひ出しても、手紙を見ても、常に悪感を起す。飲酒家も盃や酒瓶を見ないと堪えられないことは無いが、眼前に之れを見ると飲酒慾は勃興して堪えがたくなる。禁煙實行中の愛煙家も、客が對談中にブー／＼と吹かすと、遂にたまらなくなると云ふ。觀劇家は芝居だよりを見ると、俄かに其慾望が盛んになる。テニス狂はボール／＼とラケットの音がすると、落ちついて仕事が出来ぬ。

第五は、感○情○よ○り○或○る○種○の○表○出○を○惹○起○す○こ○と○で○あ○る○。話し相手もなく、只獨り室にある時でも、好きな人の事を考へたり、嬉しいことを想ひ出すと、自然にニコ／＼と笑顔になる。神様や偉人の前に出て、敬虔の情が起るときは、想はず着物の襟を正す。慷慨談に甚だしく感じて來るといつとなしに切齒扼腕する。小供でもひやかされて勝手が悪くなると、自然に頭を垂れ顔をそむける。之れに反

して得意なことがあると反り身になる。

第六は、或○る○種○の○表○出○よ○り○觀○念○及○感○情○を○惹○起○す○こ○と○で○あ○る○。体操の先生がダンスの順序方法を

忘れると、唯考へるだけでなく、實際に手足を色々と動かして見ると自然に想ひ浮ぶ。唱歌を幕れに泣き眞似をすると、何となしに悲哀の情が浮ぶ。別に嬉しい事がなくとも、わざと笑顔をなして躍つて居ると、いつとなしに愉快になつて來る。有名な心理學者のゼームス及ランゲルの二氏は云ふ。我々は普通悲しいから泣く、可笑しいから笑ふ、腹が立つから怒ると云ふが、然し、此は寧ろ順序が反對である。顔をしかめ、涙を流して泣くと云ふ舉動をするから、悲しくなるのである。破顔一笑するから、おかしいと云ふ情が起るのである、憤怒の情は切齒扼腕の態度の伴生である。其證據には、本當に泣き顔をして可笑しいと云ふ感情を起したり、本當に笑ひ顔をして悲しいと云ふ感情を起したりすることは到底出來ないと。即ち二氏は我々普通の考へとは全く反對に表出の方が、感情の原因だと云ふのである。是れが有名なゼームス、ランゲル法則と稱するのである。二氏の説は餘り極端な様であるが、然し實際上、感情と其表出とは密接不離の關係を有する事であるから、我々は之れに鑑みて言行せねばならぬ。ふしだらな服装や態度をしたり、卑しき言葉遣ひなどをしたりすると、

感情も自然に不取締りて卑猥に流れる。禮服を着用した時と、寢衣を着た時とは、誰れも其心持が大いに違ふであらう。神を拜し祈念を凝らす前に、齋戒沐浴装束を改めるのも、精神の清淨謹嚴を保つに適當なからであらう。是れ實に禮儀作法は形式的なりとて輕視す可からざる所以である。勿論高尚なる品性は、内心の修養が大切であるが、其れを裏むに禮儀作法を以てせねば、到底優雅なるものとはならぬ。云ふ迄もなく、融通の利かぬ禮儀作法に束縛されて、肝心の精神を忘れるのは甚だ面白くないが、さりとて、外形などはどうでもよいとて、餘りに無頓着なものも決して眞に修養に志すもの、採る可き道でない。尙此原則よりして、精神の修養には身体の鍛鍊の甚だ大切なことを推演することが出来ぬ。女小供はなせ些々たることにも悲しんだり、喜んだりするかと云ふに、それは筋肉が鍛鍊されてゐないから、刺戟に對する反動が過度になり、其過度なる反動より感情が動かされるためであらう。男子でも病氣の際などには兎角、女々敷なり勝なもので、是れは身体の彈力が少くなつて居るから、平常と同一の刺戟に會しても、強度の表出をなし隨つて感情が多く動かされるのである。

第七は、感覺又は觀念より或種の行動を惹起することである。是れは普通の觀念聯合と共に、各種の聯合中、最も多く我々の日常生活に關係する。實に四六時中、我々の行動の最大部分は、此聯合のお蔭で容易敏速に遂行されるので、若し此の聯合がなかつたら、我々の生活は嬰兒に復らねばなら

ぬ。我々は朝起きて洗面所に行き、齒楊子を見ると直ぐに粉をつけて齒を磨き、金盥を見れば直ぐ水を注いで面を洗ふ。洗面終れば冷水摩擦宜しくあつて、然る後机に向つて筆を右手にとれば、左手は何時の間にかノートを開いて居る。朝の仕事を終へて膳に向へば、右に箸を持ち左に茶碗を持ち、食事によする行動は殆んど反射的に解放される。服裝調ひて出勤の時間となれば、帽子はいつの間にか頭に戴き、靴は躊躇なく足へ穿つ。さて出勤して生徒や職員と顔を合はせば、器械人形のやうに帽子をとり頭を下げて「お早う」と朝の挨拶をする。書記が書類を持つて室に來ると、手はいつしか洋服のポケットに入つて、がま口を出し、認印をさぐつて一定の場所に捺印する。受持の時間が來たと見ると、猶豫なく教科書片手に室を出て教場に入る。待ち受けた生徒と顔を合はすと、敬禮宜しくあつて徐々口を開く。其間何か故障が起ると一寸躊躇するが、之れに處する適當な觀念や行動の聯合路が開けると、仕事は定規の通り順序を追ふて進行する。

右に列舉せる聯合の作用のみを考察しても、治療の參考となり、應用宜しきを得ば幾多の功能ある可きを想はせられるが、此外感情の相對性、感情の惰性、感情の膨脹性及價值性なども利用次第で、治療上の効果必らずや見る可きものであるであらう。然るに我々心理學を研究せるもの、眼から見れば多くの醫師は殆んど全く、社會人心の作用に關して無智であり、無頓着である爲めに可惜、治療の効

果を非常に減じて居ると想ふ。此事が世に所謂精神療法と稱する、醫術外の色々な治療法を簇出する最大原因であらうと想ふ。

第五節 精神治療と醫術との對蹠

然り、所謂精神治療と稱せらるゝものには、大靈道とか、掌療法とか、色々なものがあつて枚擧に遑あらずであるが、此等の中には純粹に精神治療と稱することの出來ぬものもある。比較的純粹に精神治療と稱す可きものは、宗教家とか、何々教團とか云ふものゝ中に、最も多く行はれて居る。就中、谷口氏の「生長の家」は其代表的のものであると思ふ。

谷口氏の主義は、人間を唯物視する醫師と對蹠的に立つて居る。氏の説は念の迷ひさへ除去すれば病氣は本來無い筈のものだから、治癒するのは當然であると云ひ、其論講の高潮するや、醫師に就いて藥石を服用すると云ふこと其事が、轉迷開悟の妨害となるから、服藥は害あつて益なしと云ふに至る。故に谷口氏は必ずしも自分は醫師を排斥するものでないと云ふが、氏の論講の本旨から云へば、少くとも今日の普通の醫師……精神治療を體得せぬ醫師は、治療するよりは却つて病氣を充進せしむるものであり、病人を製造するものであると云ふことになる。故に私は谷口氏の「生長の家」は、精

神治療の徹底的主張であると斷ずる。

谷口氏の「生命の實相」を読むと、唯其書物を讀んだのみで、宿病が俄然として治つたとか、重患が急速に快癒に向つたとか云ふ顯著な例が、澤山に列擧せられて居る。又神樂觀に依つて、遠隔治療の多大なる効果を擧げた例も澤山に記されて居る。某雜誌記者や、某新聞記者などは、其れをインチキ呼はりして居るが、教育程度の低いもの許りでなく、インテリ階級の人々の中にも、其顯著なる効能に驚き、谷口氏の崇拜者となつて居るものも多しやうである。私は決してインチキ呼はりするものに雷同するものではないが、さりとて崇拜者のやうに至稱命題の讚辭を呈することも出來ない。

人間は如實的には心身相關の存在であるから、物的方面よりするも將、心的方面よりするも、共に相影響する所あるは當然であらう。藥を飲んで病氣が治るのみならず、精神状態も平靜になると同時に、精神状態の如何が病氣に或る程度の影響を與へることも、二者共に有り得るのが當然で、其處が如實的には人間は心身の相關上に存在すると云ふ譯である。一者に或程度の變動があれば、他者にも多少に不拘變動があるのが當然で、其れが無かつたらそれこそ不可解である。要する所は程度問題である。其程度を極端に走せる所からして異論も生ずるのである。

故に若し「生長の家」の教を確く信じて、人間は神の子である、病氣などは念の迷ひに過ぎないと

思唯して、一點の疑も挿まず、偏に「生長の家」の教を随喜渴仰するならば、病氣の治ることのあるのは、寧ろ當然であると想ふ。唯問題は凡ての人が、そこ迄信仰するに至り得るや否やである。元來唯心論なるものは、哲學上でも難點あるを免れないもので、特に谷口氏の如き極端なる唯心論は、論理上の難點少なからざる上に、心理學說や、健全な常識上からは中々絶對唯心論の信ぜられるもので無いから、特殊の精神状態の持主でない限りは、谷口氏の云ふやうに身体は實在せない。念の影に過ぎないと確信し得るものではなからう。たとへ讀書だけでなく、靜座して神想觀に入るとしても、そこ迄の信仰を得るのは、中々に困難なことであらう。彼の禪僧の座禪に見よ、「生長の家」が教ゆるやうな、一日三十分や一時間の神想觀と云ふやうな、生やさしい修業ではなく、或は禪堂に終日無念無想を觀じ、或は寒石の上に座して、終夜公案を練ると云ふ風な、難苦を嘗むること幾年、しかも徹心見性の域に達し得るもの、夢々晨星の如しと聞く。有名なる虎關和尚の悟道秘訣の歌に云く、

足を組み、手を組むものゝ主は誰、只ひたすらに尋ね入る可し。
 尋ね入る、道を知るべの念頭の、起るにつけて極めもてゆけ。
 極め行く、兎にも角にも詮方な、つくるところをさして許すな。
 許さじと、差し向ふたる鐵壁を、打ちくだければはツとばかりぞ。

はツと云ふ、主人の御座に居直れば、寢ても醒めても天下泰平。

泰平の御代に住むよのわれらこそ、徒ら坊のなまかはとなる。

なまかはと、成りはつる身の末は何、春は花見に、秋は月見ぞ。

秘訣の歌は示されても、春は花見に秋は月見ぞの眞境に達することは、中々に尋常平凡の人間の及ぶ所に非ず。然し幸に此境地迄行けば、病氣などは全く忘れられてしまはんものでもないから、運命的の致命症に非ざる以上は、神速的に治ることもあらう。勿論かく云へばとて、私は決して禪定に徹底せるものゝ境地に至らざれば、病氣が治らないと云ふのでは無い。内容は大いに相異なるにしても精神の形式だけでも悟道者のやうになれば、病氣は治ることのある筈であると云ふ迄である。則ち疑惑の雲晴れて、明月の皓々たるが如く、我は神の子である、病氣などに懼る筈なしと思ひ切ることが出来たら、病氣は治ることは有り得る。然り、治ることも有り得ると云ふ迄で、明白には定まつて居るものではない。東京の西元博士の玄關に、永平寺の老管長の書いた「仁術如神」の額が掲げられて居る。聞けば痔疾に苦んで居たのを西元博士が治したお禮に書いたのであると云ふ。樹下石上に座禪する禪僧には、古來痔疾に悩むものが多いと聞くが、數十年の間禪定に精進をした禪僧すら罹病を如何ともすることが出来ぬ處から見ると、然して座禪修業もせず、智識のみ徒らに發達せる今日インテ

リの多くのものは、心の態度がこゝ迄になることは非常に困難である。困難と云ふよりは、私などは不可能であると思ふ。然り、そこは人々天性の型の相異で、特に哲學的思索の無い人の中には、相當高等な教育を受けた人でも、案外論理などに無頓着に信仰に入るものもある。況んや、科學的觀念に乏しく、金儲けに日夜没頭して居るやうな人、さては無教育ながら素朴な人などは、論理的批判力が妨げないから、案外簡単に信仰する。此點から云ふと、天理教祖が「學者後廻はし」と云つたのは誠に名言である。學者の長所は概して論理的批判力の發達せることであるから、通俗人のやうに容易く信仰の道に入り得ない。無教育な人や婦人は、一般に學者と反對に、殆んど論理的批判力を有して居ないから、信仰の道に入り易い。「學者後廻はし」とは能く穿つて居る。所が其學者でも病氣などに罹つて苦しむやうな場合は、諺に所謂「苦しい時の神頼み」で、平常の論理的批判力が鈍るから、迷信を起すこともある。まして凡人で、不治の病と醫師から言ひ渡されたやうな人は「溺るゝものは藁をもつかむ」で、愚にもつかぬ賣藥の廣告に欺かれたり、俄作りの神信心者ともなる。かゝる場合精神治療は格別の機能があらう。醫者に見放されたやうな病人こそ、絶對絶命の境地に立つから、一心一向になり易く、寧ろ精神的治病は此の如きものに適切である可きである。所が精神治療を弘める方面から云ふと、當世有名な博士の幾人もが手を放した程の病人が、精神治療法で治つたと云へば、

如何にも其効果の顯著なるを吹聴する好材料となり、あのやうな重病さへも治るのだから、輕症の治るのは當然過ぎると持て囃される。所謂精神治療の喧傳せらるゝ所以はそこにある。況んや、それが宗教的色彩を帯ひて來ると、幾倍も効驗いやちこに有りがたがられ、幾何級數的に信者が増加して行く。

重病患者は絶對に信じなければ治らぬが、輕症患者は半信半疑でも治ると云ふ風に、病氣の輕重と信仰の強弱とが、治効の上に比例的に現はるゝものならば、誠に合理的であるが、事實はたとへ輕症でも半信半疑では、何の効果も無いのが、純粹精神治療の性質であるから、そこは通常人の考へと違つて來る。尤も此は心身相關性の上から見た考へ方で、「生長の家」の念波治療説からは、此程度では決して満足しない。

念波治療説を高潮する場合は前にも述べたやうに、本人自身が神の子と悟り、神の子は完全である可き筈だから、病氣などに罹る筈がない。此は念の一時の迷ひに依つて、本來無いものがあると想ふて居るに過ぎないと觀じて、病氣が治るのみならず、親の念波で何にも知らぬ小供の病氣も治る。神想觀に依つて強烈な念波を送れば、他人の病氣も治ると云ふ。谷口氏は屢々ラヂオの電波と受信機との喩を引いて、念波の効力を説明して居る。こゝに至ると最早心理學の心身相關論などでは、説明は

出来ない。氏一流の念力説を信する外はない。尤も大靈道や掌療法などを説く人々の中には、人間の手からは磁氣に似たやうな一種靈妙なものが發散して、それが治病に効能を爲すのであると云ふ。如何さま人間の手と云ふものは、進化論の上より云ふも肉体の最後に進化したもので、嘗て萬國理學者大會に於て、人間の身体を解剖的に見ると、猿猴類などと殆んど同じであるに拘はらず、文明の迹から見ると、天地霄壤もたゞならず高低あるは如何なる理由に由るかとの疑問が發せられた時、それは人間の手が進化せること、人間は言葉を發明せるが爲めであると云ふ理由で、説明が出来ると云ふことに一致した。成る程五指が人手のやうに各々特殊の進化を遂げたものは、他の高等動物にも見ない。それに人間は完全に二本足で歩行するやうになり、前足が足ではなくて、手と云ふ純粹獨立のものとなり、之れに依つて色々な道具や、機械と云ふものを造り出すやうになつたから、遂に身体より外、一つも道具と云ふ便利なものを持たぬ他の動物に比して、非常に優越な地位に立つやうになつた。其上に言語文字と云ふ空間的にも、時間的にも、經驗の傳達蓄積を爲すに便利なものを有するやうになつてから、人間の文明は非常なるスピードで進展するやうになつたのである。

此の如く手と云ふものは、人間をして萬物の靈長たらしめた一番進化したものであつて見れば、そこから何か靈氣が發散することがあるかも知れぬ。特に合掌思念長きに亘れば、一層此氣の發散を濃

厚強烈にするとも考へられる。さて手から何が發散するとして、此氣を磁氣のやうな物理的のものとするか、又は全く物理的の性質を超越した靈氣と解す可きか、此邊に就いては一定の説は無いやうであるが、眞言宗の印契なども手を結ぶことであり、古來多くの宗教的禮拜は、合掌禮拜である所から見ると、合掌生氣説は幾分か信用の價值ありと見る可きであらう。又人に依つて此合掌生氣に強弱多少の差あることも考へられる。其強烈な人が、治療家たる資格を多分に有す可きは云ふ迄もない。然し、合掌生起のサムシングが、物的のものにせよ、靈的のものにせよ、掌療法など云ふものも心身相關の理に依つて影響せらるゝものなることは、多くの場合に勘定の中に入れねばなるまい。若しそれ生長の家念波なるものに至つては、生長の家が唯心論の立脚地にある以上、之れを靈的のものと解す可きは當然なことで、こゝに至ると我々は大いに考へさせられるので、前に述べたやうに唯心論と云ふものが、論理上幾多の難點ある以上、靈的念波は容易に首肯することが出来ない。

人間は神の子であると云ふ、正念を得ることに因つて、病氣が治ると云ふこと、念波に依つて何にも知らぬ相手の病氣を治すと云ふこと、は、同じやうに見られない。則ち正念を得て治ると云ふ方は心身相關の理が適用せられるが、本人が頑是なき小供であつたり、全く正念を得やうと志しては居ない人であつたりする場合には、適用することの出来ないのは云ふ迄もない。此の如き場合は念波の

靈○的○作○用○と○信○仰○す○る○外○は○不○い○。○そ○こ○に○「○生○長○の○家○」○の○特○色○が○あ○る○の○で○あ○ら○う○が、○解○き○が○た○き○難○點○も○そ○こ○に○潜○ん○で○居○る○。

然○り、○如○何○に○論○理○的○に○解○き○が○た○き○難○點○が○潜○ん○で○居○る○に○し○て○も、○治○病○其○他○に○於○い○て○幾○多○の○事○例○が○證○據○と○な○つ○て○現○は○れ○て○居○る○以○上○は、○論○理○上○の○難○點○な○ど○は○意○に○介○す○る○に○足○ら○ぬ○と○も○云○へ○る○が、○然○し○其○幾○多○の○事○例○な○る○も○の○が、○果○し○て○悉○く○念○波○の○作○用○に○因○る○と○斷○定○し○て○よ○い○も○の○み○で○あ○ら○う○か。

物○理○現○象○は、○精○神○現○象○や○社○會○現○象○に○比○す○る○と、○非○常○に○單○純○な○場○合○が○多○い○の○で○あ○る○が、○其○れ○で○も○異○因○同○果○と○云○ふ○こ○と○が○屢○々○あ○る○の○で○あ○る○。○そ○れ○が○生○理○的○現○象○と○な○る○と、○一○層○原○因○が○複○雜○に○な○つ○て、○容○易○に○其○眞○因○を○握○む○こ○と○が○出○來○兼○ね○る○。○心○身○相○關○的○現○象○な○る○病○氣○治○療○と○云○ふ○こ○と○に○な○る○と、○益○々○原○因○の○複○合○と○か、○異○因○同○果○と○か○云○ふ○こ○と○が○多○く○な○つ○て○來○る○。○隨○つ○て○念○波○で○治○つ○た○と○想○は○れ○る○場○合○で○も、○眞○因○は○他○に○存○す○る○場○合○が○無○い○と○誰○が○云○へ○や○う○。○特○に○原○因○が○複○雜○に○な○る○程、○歸○納○法○の○適○用○は○困○難○に○な○る○か○ら、○眞○因○の○發○見○は○容○易○で○な○い○。○醫○者○が○難○症○だ○と○診○察○し○た○も○の○が、○全○く○誤○診○で○あ○つ○た○に○め○に○日○な○ら○ず○し○て○治○る○こ○と○が○あ○る○。○かゝ○る○場○合○に○其○誤○診○た○る○に○氣○付○か○ず、○偶○々○「○溺○るゝ○者○は○藁○を○も○握○む」○の○人○情○か○ら、○精○神○治○療○に○かゝ○つ○た○り○す○と、○其○精○神○治○療○先○生○は○儲○け○も○の○を○す○る○。○そ○し○て○患○者○は○嬉○し○さ○の○餘○り、○會○ふ○人○毎○に○宣○傳○す○る○。○家○族○迄○が○宣○傳○係○に○な○る○。○そ○し○て○幾○何○級○數○的○に○信○者○が○増○し○て○行○く○と○云○ふ○や○う○な○事○例○も○世○の

中○に○少○く○は○無○か○う○ふ○。○現○に○私○も○曾○て○一○度○九○死○一○生○の○重○病○と○の○診○斷○を○受○け○て、○腹○部○切○開○の○手○術○の○必○要○あ○り○と○せ○ら○れ○た○の○で○あ○つ○た○が、○其○れ○が○翌○日○に○な○つ○て、○け○ろ○り○と○平○寢○し○て○し○ま○つ○た○と○云○ふ○や○う○な○經○験○を○持○つ○て○居○る○。○かゝ○る○場○合○に○念○波○治○療○で○も○受○け○た○の○で○あ○つ○た○ら、○我○も○人○も○念○波○の○い○や○ち○こ○と○に○三○拜○九○拜○し○て○喜○ん○だ○で○あ○ら○う○。○又○兎○角○專○門○大○家○は○何○で○も○な○い○病○氣○を○大○袈○裟○に○考○へ○過○ぎ○る○こ○と○が○あ○る○。○是○れ○も○私○自○身○の○經○験○で○あ○る○。○或○る○年○の○夏○休○み○に、○三○四○ヶ○所○か○ら、○夏○季○講○習○の○講○師○を○依○囑○せ○ら○れ○た○。○所○が○出○發○前○に○な○つ○て、○下○脚○部○に○大○變○痒○味○を○感○じ、○そ○れ○を○か○く○と○麻○疹○の○や○う○に○皮○膚○が○赤○く○な○つ○て、○ブツツが澤山出○來○る○。○そ○こ○で○知○り○合○の○某○皮○膚○病○の○大○家○に○見○て○も○ら○つ○た○。○尿○の○檢○査○な○ど○も○し○て○色○々○診○察○の○結○果、○旅○中○に○用○ふ○可○く○二○種○の○藥○劑○を○與○へ○ら○れ○た○。○そ○れ○を○携○へ○て、○翌○日○地○方○に○出○掛○け○た○所○が、○宿○が○大○變○涼○し○い○家○を○選○ん○で○呉○れ○て○あ○つ○た○。○で、○翌○朝○に○な○る○と、○皮○膚○病○は○殆○ん○ど○迹○方○も○な○く○な○つ○た○。○其○後○地○方○巡○講○中○は○全○く○再○發○も○せ○ず、○結○局○大○阪○の○暑○さ○で、○汗○ボ○が○出○た○に○過○ぎ○な○か○つ○た○の○で○あ○る○。

右○は○私○の○休○験○の○例○に○過○ぎ○な○い○が、○異○因○同○果○の○多○い○治○療○事○實○に○は、○此○例○に○類○す○る○も○の○や、○偶○然○治○つ○た○の○が、○精○神○治○療○の○効○果○に○歸○せ○ら○るゝ○も○の○も○少○く○な○か○ら○う○。○無○論○私○は○谷○口○氏○の○主○唱○さ○るゝ○や○う○な○念○波○の○作○用○な○る○も○の○を○肯○定○も○せ○ね○ば○否○定○も○せ○ぬ○。○世○の○中○に○は○高○等○常○識○を○以○つ○て○し○て○も、○解○釋○す○る○こ○と○の○出○來○な○い○現○象○が○多○く○あ○る○の○で○あ○り、○醫○學○の○大○家○で○も、○説○明○の○出○來○ぬ○も○の○が○多○々○あ○る○の○で○あ○る○か○ら、○決○し○て

念波治療其他の精神治療を一概にインチキ呼はりして、全否定をするものではないが、此等の治療法が統計的に見て、どれだけ多く効能を奏するものであるかと云ふことを確かめなければ、輕卒に信用は出来ない。

「生長の家」の谷口氏は、藥石の効能を盛んに攻撃せられるが、元來藥石の効能は、原則的には何病には何々藥と定まつて居らうが、複雑なる人体、人々特殊性の多分な人体、境遇事情の相異なる色々な人々にあてはめるのであるから、適中しないことのあるのは當然の次第であるし、其上醫師の病性誤診も甚だ多いものと聞くから、お門違ひの藥を投ずる結果、利かないのが當然になることも多からう。此點念波治療なども同じであらう。所が、醫藥の場合だと誤診は勿論、醫師の責任であるし、よしや正當に診斷したのであつても、患者の體質其他複雑な事情の爲めに、藥石が原則的効能を奏しないことが有り勝ちであるが、それでも治らなければ、醫術の拙劣に歸せられる。かく考へると名醫たること難いかなである。然るに一方、念波療法などでは、幸に治れば念波の効力いやちこと崇めらるるし、治らなると信仰が足りないとか、邪念があるからだとか、顯在意識では治療を希ふて居るが、潜在意識では却つて之れを望んで居ないのだとか、本人は一生懸命治さうとして居るが、家族の中に之れを好まないで却つて、反對の念波を送つて病性を悪化せしめつゝあるものがあるとか、靈界の知

己親戚等のスピリットが、本人を靈界に呼び寄せる爲めに、重き病を課して居るのだから治らぬとか、本人は或る人の強い怨を買ふて居るので、其咀ひの念波の爲めに、本人の念波が負けて治らぬのであるとか、色々な申譯がつき易く、それが何れも精神治療其ものゝ責任には歸せないで、本人若くは周囲の事情に責任を歸することになるのであるから、精神治療家は醫師よりは其立場が非常に有利である。そして其精神治療が、宗教的色彩を帯ぶる程、治らないものは自ら責め、自ら耻ぢ、自ら諦めて泣き寝入りになる。之れに反して治つたものは喜んで有り難がつて盛んに吹聴する。治らぬものは治らぬことを吹聴すれば、自分の信仰が足らぬとか、不道德なことが多いとか、兎も角も自己に不利なのだから黙して止む。それが醫師の場合と反對である。醫師の場合は患者は治らなければ、其責任を醫師に歸するのだから、罵倒したり、藪醫呼はりする。こゝに宗教的色彩の多い精神治療は、其實効より遙に多く世の中に喧傳せらるゝことになる。勿論醫師の場合でも、治つた者は喜んで吹聴するものではあるが、其れは個人的に同病者とか、話の序とかに傳へるに過ぎないが、精神治療で教團を有する場合は、衆人環視の中で發表するから、其宣傳の効能が多である。加ふるにかゝる場合に群衆心理が濃厚に行はれ、人々は理性の批判に訴えないで、感情の虜となるから一層宣傳力が強くなる。近時非常に盛大になつた「ひとのみち教團」などは確に其一例である。同教團の事は後に略述附加し

やう。

私は自分が体験したとか、現に自分が立合つたとか云ふやうな例を殆んど有せないものであるから、所謂精神治療なるものの中、摩訶不思議と云ふの外なきやうな世間の話を、肯定もせねば否定もせぬ。随つて谷口氏が、其多くの著作中に列擧して居る例證も、どの點迄確實なものであるか、どの點迄氏の念波説を積極的に裏書きするものになるか、一向見當がつかぬのであるが、少くとも其一部は私が前に述べたやうな異因同果で、念波とは縁の無いものであるだらうと想ふ。

元來、人間の神経作用と云ふものゝ性質が、生理的にも、心理的にも、未だ根本的に能く分つて居ないのであるが、摩訶不思議に見えたり、念波説の例證となつたりするやうな事例も、實は神経の作用に過ぎないことも少くはなからう。醫學上では一切の心作用には、何等かの神経作用が相伴ふことになつて居るが、谷口氏などの念力説に依れば、固より念波は決して神経作用の同伴を必要とするものでなく、神経も身体の一部である以上、念の投げた影に過ぎずして、實在せるものではないことになる。所が谷口氏著「生命の實相」第五卷に、詳細に紹介されて居る佛國の有名なる靈媒レイヌが、其指導靈と稱するヴェツテリニの靈告として傳ふる所を見ると、性交は靈界の靈魂が、現世に捕へらるゝ良であつて、靈魂が一度此良に捕へられて後は、其靈魂は地上生活を爲さねばならなくなる。尤

も靈魂が完全に肉体に宿るのは、普通は出産の刹那であるが、然し、懐妊の刹那から妊娠の全期を通じて、間歇的に靈魂は形成中の肉体に入つて来る。靈魂は自分の住居に、云はゞ自分独自の個性の判を押すために屢々出入する。そしてそこに進行して居る生理的の營みや、肉体的遺傳を修正して、自己独自の陰影を附與する。彌々出産の時になつて、自己のそれ迄の状態に就いての記憶を全然忘失して、肉体に宿り切るのであると云ふ。尙スピリットのヴェツテリニは妊娠した細胞が分裂を起すのは、細胞それ自身の化學的構成に依るのである。細胞の形狀に變化が起つて来るのは、物質的化學的反應によるのであつて受胎せんとする靈魂の干渉は無い。肉体なき靈魂が、生れ更つて此の世に來る爲めには、意識的にせよ、無意識的にせよ、精蟲と卵子との結合に依つて惹起さるゝ一種の震動に依つて、誘引せられて之れに捕へられるのである云々と。谷口氏は果して此ヴェツテリニの懐妊意見を承認して居るのか如何。若し承認して居るものとすれば、我々の靈魂は、我々の肉体を己れの念より投影したものはならぬ。たとへ肉体構成を幾分か修正し得るにしても、精蟲と卵子と云ふものは、我々の靈魂の投影ではないことになり、随つて精蟲が卵子を貫穿して妊娠した卵が出來、妊卵が化學的反應を起して、分裂作用を起し、其結果身体が出來るのであつて見れば、谷口氏の身体は靈魂より發する念の投影だと云ふことは矛盾することになる。或は谷口氏に云はしむれば、肉体は如何にも凡人の靈魂の投

影ではないが、レイヌの透視したやうに、靈界には高等なる白色光の靈があつて、下等な赤色靈などを訓練するために肉體を造り、之れに下等なる靈魂を入り込みしめ、肉體を通じて色々と試練して、次第に高等靈に進ましめんとするものである。それならば一步を譲つて、肉體は靈の投影だとして、肉體は高等なる白色靈の投影とは云へやうが、我々凡人の念の投影では無くなり、随つて肉體が病氣になつても、直接投影主でない我々が治し得る譯はなく、是非とも肉體の造り主なる、白色光の高等靈に懇願して、其力を借らなければ我々のみでは何とも致方が無いことになるではないか。靈界談に迄話が進んで、大變神秘的になつたが、そこ迄行かなければ、念力治療も徹底せぬのであつて見れば致方がない。處が靈界談迄進めて行くと、谷口氏の説には色々な矛盾を生じて来る。そこで少くとも論理上の見地からは、「生長の家」の念波治療は容易に肯定す可からざるものとなる。

「生長の家」教團の誌友に云はしむれば、論理上の矛盾などは重きを置くに足らぬ。現在念波に依つて多數の病人が治つて、其報告なり、感謝状なりが、本部に澤山集つて居るのだから、それが論より證據であると云ふであらうが、前來述べ來つた所から、私は少くとも其禮狀の全部を信する程の勇氣はない。有田ドラッグの本舗にも、肺病が治つたとか、リウマチが輕快になつたとか云ふやうな手紙が山積して居ると見えて「生長の家」の宣傳廣告に十倍する程の宣傳廣告が新聞に出て居るが、誰も其

十分の一も信じないと同じやうとは云へないかも知れないが、「生長の家」の宣傳も随分大袈裟だから、大に割引きして見ねばなるまい。

全体現今、天理教、金光教、「ひとのみち教團」、「生長の家」、大靈道、掌療法など到底數へ切れぬだけ多くの精神療法關係のものがあつて、何れも治病の神速摩訶不思議を標榜して、盛んに宣傳して居るが、若し此等多數の方面の精神療法が、其宣傳の通りであるならば、社會には病院も醫院も要らなくなつて居りさうに考へられる。一例を擧ぐれば、下の關に一人の天才的精神治療者がある。阪神地方の有識階級にも、可なり多くの信者がある。篤志にも此人は殆んど禮物を取らないで、施與的に患者に接する。傳聞に依ると毎日三百人迄は治してやるとの事である。下の關のみでは到底一日に三百人も病人が出来る譯ではなからうから、若し此人の治療が百發百中のものであつたら、一日三百人、一ヶ月には壹萬人近くも治療し得ることになるから、下の關は愚か、九州全体の病人は、此の一手で引き受けてもらつてよいことになる。「生長の家」などになると、本を讀むだけで、十年の痼疾が治つたり、神想觀を一日に三十分づゝもやれば、病氣など迹方もなくなる筈だから……そして「生命の實相全集」は、光明思想普及會が百萬圓の出版會社を起して發賣し、其發賣方法も、生き馬の目を抜く東京や大阪の商人も、三舍を避ける程で、飛ぶやうに賣れて行くさうだから……本部の神想觀で

遠隔治療も容易に且、廣くなされるのであつて見れば、之れに依つて治されるものが、無數に増加するであらうから、日ならずして世の中に病人は無くなる譯に想はれる。「生長の家」より以前に、天理教や金光教があつて、何れも全國に數百萬の信者を有して居るのだから、今頃は病院と云ふ病院は、皆門前雀羅を張るの寂れ方をなす可きであるが、大學の附屬病院や、大都市の赤十字病院などは、病床を増してもくはなほ足りないさうであつて見れば、人口の増加に伴ふて、病人の數が増すことが確かであると共に、多くの宗教や、教團や、其他の精神治療と云ふものが、事實、宣傳の十分の百分の一も治病の効果を擧げて居ないことを證して餘りあるではないか。由之觀之、如何に最負目に見ても世の所謂精神療法なるものは、決して彼等關係者の宣傳するやうな、大袈裟な効果を擧げて居るもので無いことは明白である。

第六節 藥石論に對する批判

かく云へばとて、屢々述べた通り、私は決して精神療法なるものを排斥するのでもなければ、世の中に今日の人智を以つてしては、説明の出來ない純粹スピリチュアルな現象が無いと云ふのでもない。摩訶不思議に病氣の治つたと云ふ報告の凡てが、インチキであるとも想はない。唯私は世の精神

療法關係の人々の宣傳が、餘り大袈裟過ぎることを誠告するのみである。特に谷口氏の「生長の家」のやうに、今日の藥石療法を無視否、有害視せんとするに至つては、私は其餘りに大膽なるに驚かされるのである。谷口氏は藥劑を藥にするか、毒にするか、有効にするか、無効にするかは全く我々の念の如何に依る。藥劑其のものの中性無記のものである。某藥が某病に能く利くと云ふのは、長い間多くの人が、能く利くと信じて來たから、其の信用の念波が累積し集積して、効能を擧げるのであると云ふ。如何にも信用が効能を大にすることは、心身相關の理からも首肯せられる。昔から「醫は宜しく國手を選ぶ可し」と云ふのは、人間の生命は二つないから、間違つて殺されてはたまらぬと云ふ意味もあらうし、今一つは信用して飲めば、藥の効能が多いと云ふ意味もあらう。然しそれは程度問題で信用が藥石の効能を全然左右すると云ふ意味ではない。それはさて置き、谷口氏の論法を以てすると新藥發見など云ふことは無意味になりはせぬか。是れも私の体験であるが、私は書生時代に鳥目のやうになつて、夕方になると、下宿の六疊の部屋に掛けた自分の帽子などがはつきり見えなくなる。散歩に出ても眼のさきが暗くて、一人では危険であつた。それが帝大の附屬病院で診察を受けて、四五日藥を飲むと治つた。念の爲め再度の診察を受けに行つたら、主任醫長は周圍の臨床學生に向つて、自分の新藥が能く利いたと、自慢して話された。云ふ迄もなく新藥には前代からの念の累積

もなければ、現代人の念の集積も無い筈で、唯発見者一人の念力しか無い。此際我々は僅に発見者一人の念力しか無くても、能く利く薬石が出来ると云ふ風に、私に利いた薬の効能を発見者の念波作用に歸す可きか、其れとも普通の考へ方で、薬石其ものゝ効能に歸す可きか、想ふに私に新薬を試みた教授は、私を試験台の一人にしたのであるから、必ず利くに違ひないと、非常に強い確信を有して居たのではあるまい。大概の新薬は幾多の人々に試用して見て、失敗することもあるし、成功することもあり、其成功が累積してこそ遂に信用することになるのが順序ではないか。然るに谷口氏の論法は之れと反對で、信用の念波が先、働いて、中性無記の薬が能く利く薬になるのだと云ふ随分極端な唯心論ではある。

成る程心身相關の理によつても説明が出来るやうに、世にはモヒ注射だと信ぜしめて、水道の水を注射しても胃痙攣が治つたと云ふやうな例もあるのだから……また之れと反對に、モヒを水だと云つて注射してモヒの反應の現はれないやうな例もあるであらうが、此の如きは變態性のもので、普通人に於てはモヒはモヒ、水は水の性質を現はすのであつて見れば、薬石のそれ／＼の性質特能は一定して居ると見ねばならぬではないか。モヒを注射してもモヒの反應が無いと云ふのは、モヒが中性無記であるからではなく、心身相關の理より來ると解する方が、念波で説明するよりは遙に合理的では

あるまいか。然るに谷口氏は薬石のみならず、虎烈拉や、チブスの細菌でも本來は中性無記のものであるから、之れを恐れて猛烈なる病毒作用を起すと云ふやうな念をさへ起さねば、決して傳染病にかゝるものではないと云ふ。我々は谷口氏の勇敢には驚愕するの外はないが、然し之れを事實に徴するに別にチブスを恐れると云ふやうなこともなく、全く無關心で或る所で食事したものが、チブス菌にあつたために、同病を起すと云ふ順序になるものが世の中の普通の例である。谷口氏は顯在意識では無關心であつたであらうが、潜在意識中には恐怖心があつたのであらうと云はれるかも知れぬ。成る程さうかも知らぬ。然し潜在意識中に於てならば、チブスや虎烈拉を恐れると云ふことは今日の文明人ならば例外なく大概さうであらうが、其れに或る者だけがチブスに懼つて、他の多くの人々は之れに懼らぬと云ふのは何故であらう。此場合懼かつた者の食物系統にチブスの細菌が存在したとすれば、其れは恐れた念の爲めではなく、チブスの細菌其ものに、チブスを起す毒性があると云ふ結論になるではないか。事實昔、流行病の原因たる細菌の發見せられず、随つて流行病の豫防法も講ぜられて居らなかつた時代には、疫病が猛烈なる傳染を逞しうして、歐洲中世紀などでは黒死病で人口の三分の一を殺したことがあると云ふし、我國でも手のつけられない程、虎烈拉病の流行したことがある。然るに近時、防疫陣の堅固になつてからは、文明國には流行病が迹を絶つに至つたものも少くない。

いではないか。歐米各國には唯心論は流行しないし、況んや谷口氏の念力論もまた渡つて居まいから、是れは全くペストや虎烈拉の細菌の猛毒を知つて、衛生設備なり防疫陣を堅固にした爲めと結論せねばなるまい。

勿論私は近時精神治療法と稱するものが、頻りに流行する一半の責任は醫界にあるとも考へるものである。醫者にかゝつても治らない病氣が多いから、醫學博士は簇出して世人の信用が少く、さてこそ精神療法に走るものが多くなつたとも云へる。是れは一面基礎醫學は發達したが、其割合に臨床大家が少いと云ふ實情もあらう。然し冷靜に考へて見れば矢張り社會衛生は進歩して、流行病は大いに少くなり、個人の健康も決して昔に比して減退しては居らない。病院のみが徒らに繁昌すると云ふが、其れは全体の生活程度が高くなつたから、昔ならば捨て置くか賣薬位ですませたものが、病院通ひをするやうになつたからである。社會衛生が進歩し個人の健康が増進しつゝあると云ふ、最も明白な確實な證據は人間の壽命、文明人の平均年齢が大變多くなつたと云ふことである。我國でも年々の統計を比較すれば思半に過ぐるものがあらう。極めて常識的に見ても徳川時代などでは、四十二歳を男の厄歳、三十三歳を女の厄歳と云ひ、此厄歳を無事に過すと男は隱居の仕度をなし、女は華かな夢から引きさがつたものであるが、昭和の今日では、社會に活躍せんとする者は「四十五十は鼻垂れ小

僧、六十七十が働き盛り」の勢ではないか。女の人でも女學校を卒業した娘のお母さんが、娘と姉妹然たる華美な服装をして、涼しい顔で打連れて歌舞音曲會に出掛ける。

成る程世の中が複雑になるに連れて、色々な文明病も現はれて來るやうではあるが、然し昔、四百四病と云つたものが、今は其倍數にもなつて居るやうに病名が多いのは、是れは新に出來たと云ふよりは醫學の研究が精密になつたゆゑに、昔發見し得なかつたものを發見したと云ふに過ぎないものが最も大多數であらう。勿論社會的環境が變化したゆゑに、新しい病氣の出て云ふこともある。一例を擧げると今日の文明都市は非常に騒がしい。コンクリートの上を、アスファルトなどで舗装した道路の上を、引つ切りなしに電車、自動車、自轉車がケタタマイ音を立てながら縦横に走る、兩側には鐵筋コンクリートの高層建築物が立並んで之れを反響する、紅塵萬丈ならで黒煙滿空、晝なほ暗しと云ふ中で、終日金が敵に神經を針のやうに尖らして働くと云ふやうな圖は、元祿、享保の繁榮時代にも夢にも見なかつた新風景で、大江戸日本橋は生き馬の眼を抜くと、田舎者を驚かした徳川時代の繁忙も、今日此頃其日本橋のお隣、銀座街道のカフェー、バー、ネオン、ジャズに、さては夜店商人の聲を限りの自家廣告などから合奏する騒忙とは比較にならぬ。其上金力は益々萬能と想はれ、しかも丁稚小僧は云ふもさらなり、凡そサラリーマンの百人中九十九人九分迄は、其萬能の金には縁少く、徒

らに百貨店の陳列品を怨めしきうに見て廻はるのみとあつては、神經衰弱と云ふやうな文明病の現はるゝは當然過ぎる。

然し一方に新しい病氣が現はれても、一方に從來の病氣を難なく撃退する方法が現はれる。赤ん坊が生れる時に母の汚物が眼に入つて、之れが爲めに生れながらの盲目になる不幸兒が、昔は多かつたさうだが今日は初湯の後、産婆の差す一回の點眼薬で苦もなく其難を免れる。昔はジフテリアは小供の命取りと定まつたものであつたが、今は一回の注射で手後れさへなければ十發十中命拾ひをする。結局新病が多少發生するにしても、舊來の病氣が徹底的に撃退せられて行くから、プラスとマイナスで如何なる計算になるか統計をとつた譯ではないが、常識的に考へてもマイナスの多いことは明瞭である。それは前に擧げた壽命の長くなつたことでも分るし、人口の増加率からでも察せられる。

徳川時代三百年は大體泰平無事であつたに係はらず、人口の増加は極めて遅々たるものであつた。固より統計の無い時代であつたから能く分る譯はないが、明治維新も可なり隔つた時代に、私達は「三千餘萬の兄弟どもよ」云々と歌つたのであるから、之れから推して徳川時代の人口は決して三千萬を越しては居なかつたことが分る。然るに維新より僅に六十八年しか経つて居ない昭和十年の日本人口は七千萬人に近いやうで此間に二倍になつて居る。十月一日の國勢調査では朝鮮、臺灣を加へたら

一億になるかも知れぬと新聞に書いてある。元和偃武、世は彌徳川氏のものとなつた時代の人口が、幾許であつたか全然分らないにしても、徳川三百年を通じて如何に人口増加の少なかつたかと云ふことが想はれる。察するに徳川時代には地方偏僻に於ては、三人以上の小供はマビイテ暗から闇に葬り去る風習があり、さもなくとも墮胎を罪惡とする法律は無かつたために、人口が増加しなかつたと云ふことも理由の一つであらう。然し之れよりも人口の増加しなかつた幾倍も大なる原因は、社會衛生設備發達せず、之れが爲めに各種の傳染病は猛威を振ひ、また幸ひに傳染病などの難は免れても、個人衛生思想の幼稚なりしたため、天壽を全ふせずして天死するもの多かつたことであらう。特に幼児の死亡率は今日とは比較にならぬ程多かつたやうである。産むことは寧ろ今の人多い位であつたが、育つ率は非常に少なかつた。老人は口を開けば今の小供は弱いと云ふ、如何にも小學校の小供や中等學校の生徒を見ると弱いものが多い。これは昔ならば小學年齢になる迄に、鬼籍に上つた筈のものが、文明の恩澤を受けて生存するものが多い爲めである。文明になる程生存競争は激烈になるが、人間の之れに抵抗する直接間接の力は其れ以上に發達し、特に小供の保護は昔とは比較にならぬ程行き届く。結局昔ならば死す可かりしものが生き長らへて行くので人口は大いに増加することになる。其生き長らへて行く事情の重なるものは生活の向上と醫藥の發達である。

醫學博士は毎日平均二人づゝも出来て行くのに治病率は増加しないとは、精神療法家のみならず一般有識者も常に之れを口にす。我々も多少其感じはするが、然し冷靜に考へたら矢張り醫藥は大なる進歩を遂げて居るのである。前來屢々述べた傳染病の豫防や、又外科手術などは實に大なる進歩をなして居るのである。唯、脈搏を殆んど唯一の診斷材料とせねばならぬ内科になると、今日の洋法醫は脈搏診察の經驗に多年憂き身をやつした漢法醫に及ぶが、然し今後は醫藥も世界的となり、和漢洋各方面の長所が綜合されるやうになるであらうから、其進歩も期して待つ可し。要するに醫藥療法は歸納的に年と共に確實さを加へて行くし、新發見に依つて進歩しても行くこと斷言して憚らない。

然るに一方精神治療法なるものを見るに、進歩の迹が誠に曖昧である。一宗の開祖となるやうな人には奇蹟と見るの外なきやうな神功を奏する場合もあるが、然しそれは雪舟、探幽の繪に於けるベトーベン、モツアルトの音曲に於けると同じく全く天才的のものであつて、天才は多く出るものでないから結局多く期待がかけられぬ。そして又治療の天才と云はれる人物でも、神功を奏する割合は實は餘り多くないやうで、多くは其神功を奏した少數の例が喧傳せられて、百發百中のやうに騒がれるのである。然り、たとへ百發百中であっても天才が多く現はるゝものならば、依頼することも容易であるが、何時何處に出現するか分らぬ天才であつて見れば、餘り多くあてにはならない。新聞を賑は

す位が關の山であらう。況んや天才らしく見せかけるインチキ者流が、此方面には非常に多きに於ては我々は餘程警戒せねばならぬ。何々流とか、何々式とかの精神療法は雨後の筍のやうに簇出するが、聲のみ徒らに大にして何れも朝四暮三の數あり。若し彼等の掛け聲の半分でも眞實であつたら、前にも云つたやうに社會に病に苦しむものは無くなる筈である。

私は前に云つたやうに昭和五年から足かけ六年の間、世にも因業な痔瘻に罹つた。勸めらるゝまゝに種々の醫藥を用ひた外に、色々な精神療法も試みた。私は決して精神療法なるものを信用しないと云ふのでは無いから、其治療を受けながら抵抗精神を亢進さすと云ふやうなことは無かつたと思つて居る。そして私のかゝつた人々は決して間に合はせの療法者ではなく、生き神様と尊信されて居る人も二三あるし、非常な能力者だと折紙つけられた人もあつたが、何れも何の奏効もしなかつた。困り抜いた揚句昨年十月から遙々東京に通ふことに決心して、斯道の名醫西元博士の注射治療を受けることになつた。何分五年越の宿痾で病巢が十一ヶ所もあつたのだから、さすがの西元博士も最初診察をした時には、是れは神様で無ければ治せぬかも知れぬが、一ヶ年も辛抱せられる覺悟があれば手を付けて見やうとの事。方法に盡きた時だから、私は覺悟を定めてそれから二週間毎に上京して治療を受けた。幸、博士の注射は苦痛も極めて少く、注射後動いてもさしたる苦痛は伴はないので、私は

毎回大阪から夜の急行列車に乗り寝臺の夢の間に翌朝東京に着き、直ぐに芝區田村町四丁目の西元肛門醫院に行き、イの一番に博士の治療を受けて、又其日の午後一時頃の急行で歸り、翌日は定時に學校に出勤するのが常であつた。一回毎に奏効が眼に見えて行くので、東京通ひも別に苦にならず、遂に十五回の注射で凡ての病巢を征服した。一ヶ年の約束が半年餘りで治つたのは、全く博士の神術の功に因ると云ふの外はない。實に西元博士の痔疾注射治療は百發百中と云ふてもよい程であるらしく、私の紹介した人々は凡て治癒して喜び合ふて居る。さて此様な確實さを精神治療に求めることは出来まい。尤も谷口氏の説は天才を要せぬので生命の實相の本を讀むなり、神想觀をすれば誰でも治せるのであるが……新聞廣告其他の宣傳が中々に巧みなやうであるから、本の賣れ行きは大變なものらしいが、果して其幾許が治病の効能を現實に見るのであらうか。効能が無いのは疑念を懐くからである。と叱られやうが、哲學的の理論は兎も角、實感上に於て身体は念の影像に過ぎぬ。決して實在では無いと云ふやうなお説教が、一點の疑ひなしに信ぜられやうか。信ぜられぬものは縁なき衆生度しがたしと、つく放されば泣き寝入りの外は無いが、兎に角一見生やさしいやうで、其實確實性の乏しく進歩性の無いのが精神療法の缺點である。此點になると臨床的には進歩未だしと云はれながらも醫藥の方が長所多しと斷言が出来る。谷口氏の醫藥無効有害論は、一部の信者には痛快がられもしや

うが、我々は其大膽さに驚くと同時に、そこに世道人心の爲め大なる危険ありとすら感ぜられるのである。

第七節 科學の功績を無視するは盲目者

谷口氏のみならず世の宗教家や精神治療者は、科學の功績を正視せずして、其缺點（實は科學其もには缺點は全くない筈で、缺點と目ざすものは皆、之れを應用する人の罪であるが……）のみを數へ立て、甚だしきは之れを惡魔視するに至る。西洋でも科學の行きつまりなど叫ぶ者もある。然し冷靜に合理的に考へたら、此は決して科學其もの罪でなく、且科學には決して行きつまりは無いのである。人或は毒瓦斯や焼夷彈などの發明を見て科學を咀ひ、又工場病の蔓延を聞いて科學の應用を悲しむが、然し其れは云ふ迄もなく科學其もの罪ではなく、之れを用ふるもの罪である。科學の眞理其ものは、之れを應用する人間に依て害毒の結果を來すこともあれば、大功を奏することもある。科學の眞理其ものは

見る人の心々にまかせおきて

高嶺にすめる秋の夜の月

と同じく、人間の利用を待つて如何様にもなる。否、社會や個人の幸福を増進する方に用ひてこそ、科學の眞理研究に献身的努力を拂つた多くの學者の期待に添ふものであらう。千里眼の能力者があつても、其能力者一人が遠隔地の光景を見得るのみである。天耳通の能力者が現はれても、其能力者一人が遠方の聲を聞き得るのみである。それも漠然たるものであるらしい。然るにラヂオが發明せられては、何百萬何千萬の人々、世界各地の人々が同時にパリーの名樂も聞かれるし、伯林のヒツトラの雄辯も聞かれる。テレビジョンは、今日未だ簡易な機械が無いから、直接我々の居間に捕へることは出来ぬが、新聞寫眞で満足せねばならぬが。然し電話とテレビジョンとが結合せられて、千里相隔つるの友と互に顔を見合はせながら、話の出来るやうになるのも時の問題であらう。されば珍奇である云ふ上から、我々は千里眼や天耳通に興味を感じるものゝ、單に見るとか聞くとか云ふ結果の上から云へば、そんなものは科學の應用に比すれば問題にならぬのである。そして科學の應用の方は、日進月歩着々と成功を踏みしめて行き、窮局する所なしと云つてよいが、千里眼や天耳通は二六百年前の釋尊の時代も、二十世紀の今日も何の進歩も見ない。それで居て科學を罵倒するとは何としか狂氣沙汰であらう。若し夫れ科學の應用に依つて、我々の生活の物資が如何に容易に、如何に豊富に、如何に變化多く得られるやうになつたか、我々の生活が如何に擴大されて、文字通り世界的にな

つたかと云ふことを靜かに考察したら、科學を咀ふたり罵倒したりするのは、恩知らずの甚だしいものと分るであらう。一介のサラリーマンに過ぎない我々の衣食住も、實は世界を衣、世界を食ひ、世界を住んで居るのである。そしてそれが直接間接に、科學の應用の賜物ならぬは無いのである。此は決して比喩や寓言では無く、現在の事實であることは誰にも首肯されるであらう。

科學は永久に進歩して止まないであらう。それは臍を得て蜀を望み、現狀には長く安んずるを得ない情意の不可抗力が、我々人間に存在して拍車を掛ける以上、そして理智は創作性を以て本性とする以上當然過ぎることであらう。科學に行きつまりなどのあらう筈がない。行きつまりのあるのは、卑怯な人心、窮屈な偏狭な心の持主の主觀のみである。明朗眞摯、死して後止む底の學者の前には、科學の行き詰りなど云ふ人間理智の悲觀は無い筈である。此世ならぬ靈界など云ふ所に於ては知らぬこと、人生社會に於ては科學は益々研鑽せられ、其れに依つて發見せられた眞理に對しては、我々はどこ迄も忠實に順つて行かねばならぬ。科學の眼醒めなかつた有色人種の世界が、生存競争場裡、如何に悲惨な結果になつたかを觀察したら、科學を咀ふものは亡國を理想とするものであると、斷言してもよい。我々日本人が、他の有色人種と選を異にして白人に抵抗し、世界に優位を占むるに至れるもの、固より上に一天萬乗の皇室を戴き、下に三千年の統一歴史を有する大和民族の優秀性に富むが故

ではあるが、然し嘉永六年米艦浦賀に來航して、東洋流の退嬰主義の夢を破るなくんば、到底今日あるを得なかつたであらう。此黒船來が一大轉機となつて、科學の輸入に全力を盡し、徳川時代には西洋のバイブルに比す可き程重んぜられた論語でさへ、一時は之れを口にするもの無き程に、西洋崇拜熱に浮かされたが、此の爲めに國粹さへも棄て、顧みざらんとする弊に迄陥つたもの、之れ程の熱中振りがあつたればこそ、西洋ではルネサンス以來五世紀の星霜を費して發達した百科の精粹を、僅に半世紀餘りで大体消化し同化迄して、工業製産品の如きは、西洋各國へ逆輸するの勢となり、世界各國は關稅の障壁を高くして、防備に懸命になつて居るの實狀を、科學罵倒論者などは何と見るのであるか。固より我工業製産品の世界に優位を占むる所以のものは、能率の割りに職工の賃銀の大きい低廉な事や、社會組織の歐米と相異なるなど、他に種々の原因もあらうが、何と云つても科學の應用を十分に、呑み込んでしまつたと云ふことが最大の原因であらねばならぬ。谷口氏の「生長の家」の宣傳が如何に行き渡つても、光明思想が如何に普及しても、科學の應用を除外しては到底、大和民族の世界的雄飛は望めまい。但、谷口氏の宣傳に依ると、上海事件の際、「生長の家」の誌友の家には敵の砲彈すら其猛威を避けたと云ふことだから、此筆法否實例で行けば、苟も我國陸海軍の將士が「生長の家」の誌友にさへなつて置けば、日米戰爭何者ぞ、日露再戰何者ぞ、世界の強國が束になつて攻

め來るとも、何の恐るゝ必要もなく、高橋藏相がインフレ公債の増發に日夜頭をひねつて迄、陸海軍備の充實を計畫する必要はなくなり、天下は至極太平なる可きも、さうは問屋が卸すまい。

私は想ふ、たとへ唯心論や唯靈論が哲學上成り立つとしても、隨つて物界の成立因が那邊にあらうとも、物界が現存せる以上、物界には物界自然の法則が行はるゝのが當然ではあるまいか。物界を念力で動かすと云ふことは、可能か不可能か、私はまだ確かな判斷材料を持たぬが、假りに心靈論者が云ふやうに、其事可能なりとするも、彼の靈媒の實驗などを見ればボールをころがしたり、テーブルを少し許り動かしたりするのですら、震動とやらを強く靈媒に送つてやらねば出來ない藝當である。この様なことでは山を動かし、河を逆流せしむなどは想ひも寄らぬ。敵機墜落、敵艦沈没豈望むを得んや。如かず汽車や汽船を走らすには蒸汽力を用ひ、大小工場のモーターを動かすには電氣を用ふるには、飛行機の發達促進せざる可からず、製艦競争避く可からず。已に物界を左右するには物界自然の理法を利用するに如かずとして、さて其物界自然の理法を研究するものが、則ち科學であつて見れば、科學の重んず可きは言を俟たず。

人間の身体も其成立の第一原因は、容易に窺ひ知る可からざる宇宙の神秘に屬するであらうが、然し、已に身体の成立せる以上は、身体自然の法則と云ふものが無ければならず、それは凡そ念波など

と云ふものゝ法則とは、趣の相異なるものであらうから、其身体に起る變態現象である病氣を治すには、先づ身体自然の理法を本とせるものに訴ふ可きが順序ではなからうか。そして身体自然の理法を研究するのが生理學や醫學の天職であつて見れば、治病は先づ醫藥に訴ふ可きは當然過ぎはせぬか。谷口氏に依れば、身体は念の投影だから、影の悪い所を治すには、源の念の方を正しくせねばならぬと云ふ。若しも念が現在に物を作り出したり、身体を造り出すと云ふ風なことが出来るなら、念の投影を正しくし得るは當然とも想へるが、事實は今日只今、谷口氏と雖も百合の一片所か小石一つも念造し得ないと信ずる。一種の幻影に似たやうな現象を、神經の異状になつたものに見せるやうなことは世にあり得るが、母の胎内を借らずして赤ん坊を念力で造り出したものは神人、佛陀と尊信された人々にも未だ會つて聞かざる所。宗教上の奇蹟などもキリストの昇天とか、維摩の妙喜國點出とか云ふやうな種類で、變態心理學で説明の出來さうなものが多い。物質は念の影だ、肉體は念の迷ひだと云ふても、念が積極的に一石一草をも創造し得ずして、森羅萬象悉く物は物より生ずるの外なきを見れば、已に肉體として現存せるものを肉體自然の法則を無視して、念の自由にすると云ふことは出來ぬのが當然であり過ぎるではないか。我々は念波と云ふものが、純心靈的のものか將、案外な物理的のものであるか、今日に於ては未だ全く之れを知る由もないが、そんな譯の分らぬものに依頼せんより

は、肉體自然の法則を歸納的に研究して行く科學の眞理を先づ尊重し、科學的の治療法で手がつけられぬと見放された後に、絶望を救ふ一法として念力治療に走るのならば當然の順序と想へる。

但、私はかく云へばとて決して科學萬能論者では無い。唯、科學的に進むことが當然である範圍内に於てのみ科學を尊重するのである。彼のナチユリズムの極端なる論者に賛同するものではない。且、こゝに私の一言注意したいことは、科學の研究大いに進み、科學の應用益々盛んになるに伴ひ、それ相當の修養が我々に必要であると云ふことである。科學及科學の應用の進歩した割合に、之れに對する人々の修養が足りないこと云ふことが、科學罵倒論などを生むやうになつた一つの原因ではあるまいか。科學の應用に依て我々の社會的環境が急速に變化し、我々の生活狀態が著しく變化せるに拘はらず、之れに適應するだけの修養が我々に出來て居ない爲めに、社會生活が不安になるとか、家庭の圓滿が害せられるとか云ふ様な結果を生んで居ることが多いと見る。少くとも科學の應用の無かつた徳川時代の單純な時代に比すれば、今日のやうな複雑にして變化のスピードの速い時代に住むものは、其性格が敏捷であると同時に弾力性に富んで居らねばならぬ。此性格修養が科學の應用の進歩よりは一般に後れて居る。皮相なる觀察を爲す人々の眼には、そこに科學の弊害など云ふ問題が起るのであらう。田舎住ひの青年よりは都會住ひの青年の方が、遙かに誘惑され易い環境に置かれて居ると

云ふことは誰も疑ひを持たぬであらうが、之れと同じく徳川時代の人々よりは、今日の人々が遙に多く修養の必要を持つのである。日本は最近迄は科學の輸入に一生懸命であり、科學の應用に是れ日も足らずであつたために、肝心の科學に對する態度の修養を怠つた。教育者も此邊の用意が足りなかつた。世は科學的の色彩に飾られ、社會は科學的事業に満ちながら、其眞只中に置かるゝ人間に之れに對應する用意が足らなかつた。電燈、電話、電鐵、電扇、ラヂオと今日の我々は、電氣の應用なしには一日も生活の出来ない環境に置かれながら、我々の電氣に就いての常識は餘りに貧弱ではないか。これは一例に過ぎぬ。科學の智識、科學の應用は未だ専門家の間に進歩したに過ぎないで、一般人の間には未だ普及して居ない。一般人は科學の應用の中に浸つて居りながら、科學に就いて餘りに知らなさ過ぎる。否、實を云ふと科學を教へて居る先生達ですら、多くは未だ科學を體驗して居ない。隨つて未だ科學的に性格が修養されて居らぬ。此點は遺憾ながら未だ歐米人に劣つて居る。されば今後科學を益々進歩せしめ、科學の應用を廣汎にする爲めには、必ず之れと併せて科學的修養を十分になさなければならぬ。科學的修養は決して我々の修養の全部ではないが、少くとも我々日本人に缺けて居る、大切な方面であると云はねばならぬ。云ふ迄もなく科學及其應用は、我々の文明生活を進展する方便的價値を有するものである。此價値を大にするか或は反對に、無價値有害にするかは掛つて主

人公たる我々の双肩にある筈だ。其主人公たる我々の性格修養を措て、科學の價値を大ならしめんとするは木に縁て魚を求むるの類のみ。否、科學の偉力のなるものなる以上、之れを用ふるの法宜しきを得ずんば百弊百害競起することなしとせず。危いかな。

第八節 治病に對する佛耶二聖の態度の差

因て云ふ、キリストは治療に就いて多くの奇蹟を現はして居るが、釋尊には殆んど此事が無い。キリストは奇蹟能力があつて、釋尊には之れが無かつたのであらうか。釋尊程の人に之れが無かつたと云へぬが、事實は分らぬ。此事は一面次のやうにも解釋が出来る。元來治病致福と云ふやうなことは、俗衆をチャームするには大なる効能があるが、宗教の本質には決して重大關係のあるものではない。治病致福で信仰に導くが如きは、動もすれば眞實の宗教的正覺を得しめないで、却つて邪道に誘ふ結果に陥り易い。眞の宗教は治病致福を目的とするやうな低級なものでは無い。想ふに釋尊の出現せられた時代は、印度は已に高度の文化的發達を遂げ、婆羅門の徒の如きも、宗教上では非常に高尚な域に達して居たのである。特に釋尊は貴族的教育を受け、其佛敎的正覺を得る迄に高度の宗教的觀念をも有して居り、成道後釋尊の周圍に集まつた人物には、三迦葉を初め阿難、目連、沙利弗の如

き大智識が多かつた。釋尊の教化は先、當時の貴族、富豪、智識階級に施されて、次第に一般民衆に及ぼした形迹であるから、治病致福と云ふやうな低級な手段は要しなかつた。之れに反してキリストは、其れ自身高き教養のあつた人ではなく、直覺的天才の宗祖であり、其出現の時代のユダヤ文化は釋尊出現當時の印度文化よりは遙に低級であつたであらうし、又キリストの周圍に集まつて來た人々は、十二使徒を初め皆漁夫、百姓、職人、貧者のみで、其教養の程度に至つては釋尊の弟子とは比較にならぬものゝみであつた。此等低級の人物にとつては、治病致福は非常なるチャーミングなものであつた。こゝにキリストの傳に治病の奇蹟多く、釋尊傳に之れなき所以があるとも見られる。尙、キリストは刑死したのであるが釋尊は病死した。しかも釋尊は病氣の爲めに非常に苦しまれた。傳に依ると、釋尊は阿難と共に竹芳村で安居せられた時に、重き疾に罹り身体中が痛んで死ぬ程苦しまれた。釋尊は其涅槃地と定められた拘尸那揭羅城地に行かれる迄は、常に阿難の介抱を受けながら苦しい旅行をつゞけられたのであつた。高弟共の爲めに涅槃經を説かれる場合でも、身体の苦痛と戦ひつゞけられた。釋尊程の偉大なる宗教家が、病氣に苦しまれると云ふやうなことは、谷口氏の説から云へば有り得やうとは思はれぬ。四諦十二因縁の理を大悟し、八正道を完修して佛陀となられた釋尊が、涅槃に入る迄病に苦しむなどと云ふことは有り得やうが無い。されば釋尊の高弟迦葉ですらも、之れ

を怪しんで、釋尊に此事を質問せられた程である。然し釋尊の病氣に苦しまれたことは疑ふ可からざる事實であつて見れば、谷口氏の正念説は不可解になる。或は此事實をキリストの刑死と同じやうに、衆生に代つて苦しまれたのであるとか、人生は生老病死の四苦を免れぬものなることを、現示せられたのであるとか云ふ風に解釋するものもある。治病治苦は爲し能はざりしに非ず、爲さざりしなりと云ふことにすれば問題は無いが、随つて谷口氏の説も生きて來るが然し、釋尊の他の場合のことに觀察すると、肉体には肉体の法則があり、之れを治療するには醫師を頼むのが當然であるとせられたやうに思ふ。それは釋尊が竹林精舍に居られた時のことであらう。或る時病氣に罹られた、王は心配せられて、侍醫の耆婆（東洋では古來神醫を云ふ時に必ず耆婆、鵝鵝を數ふ）を遣はして見舞はした。釋尊は其診察を受け服藥して快癒せられた。のみならず耆婆の勧めに従ひ、教團の人々の衛生状態を改められた。此等の點より見ると、三界の大導師たる釋尊も、餅は餅屋で治病、衛生の事の如きは、之れを専門とせる醫師に委す可きものとせられたことが明白になるではないか。

「生長の家」では、釋尊は世人が云ふやうに、自ら精神療法を用ひられなかつたのではない。「増一阿含經」第四十に、釋尊は弟子に對して、「弟子よ、お前は今身体の病に苦しんで居るが、更に三世にわたりに盡きることの無い心の病がある。その病を除かなければ惱みは何處迄もつき纏ふであらう」

とあるのを引用して、釋尊が精神治療をせられなかつたなど云ふのは、佛經の讀み方が足りないのであると、高い廣告料を拂つて新聞紙に迄掲げて居るが、然しながら此程度の事は、宗教家の常套語で、之れを以て釋尊が治病術を施された證據にしようとは「生長の家」も餘程窮したものに見える。此様な句を態々引用せられる位ならば、何故に百尺竿頭一步を進めて、私が前に掲げた觀音經などの句を用ひて宣傳にせられないのか。世には觀音經にある觀音様の御利益を、文字通り信仰して居るものもある程で、ラヂオを講演で昨年九月廿一日の大阪の高潮風水害が、あの程度に止まつたのは、大阪の西方面災害地に必ず一人位の觀音信者があつたからだ、と放送せられた講師がある程だから、治病、致福は愚か地震、雷、暴風、火難、水難、刀劍難など、凡そ世の中の天災地變より、人難、社會難、何一つ免れ得ざるもの無く、積極的には百福一つとして得られざるもの無いと云ふのであつて見れば、そして「生長の家」の誌友は病氣が治るのみならず、上海事變には大砲の難を免れた實例があり、大阪の濱寺とかには近所隣の家には、海水が浸入して庭樹が皆枯れてしまつたのに、誌友の家の庭樹のみは、皆枯れないで生々として居るとか云ふやうな例を、盛んに書き立て、居られる位だから、「生長の家」は、觀音經の立派な裏書きをして居ることになるのであるから、そして觀音經は云ふ迄もなく、釋尊の説かれたものであつて見れば、觀音經を文字通りに受らるれば、病氣を治すなど

云ふことは全く朝飯前の事である。然るを何を苦しんでか「生長の家」は、宗教の常套語に過ぎないやうな、「増一阿含經」などの句を引證せられたか、私は諒解に迷ふものである。私は「生長の家」に勧める、觀音經に書いてある事は凡て文字通りであつて、「生長の家」の誌友となつたものは、誰でも觀音經通りの御利益を、二十世紀の今日に於て得られるのであると宣傳せられたら、「増一阿含經」の句などを引證せられるより、何十層倍も誌友を隨喜渴仰せしめ、隨喜渴仰の結果は、舊友、知人さては病氣に苦しみ、不運に泣き、溺るゝもの藁をも握まんとして居る連中を、誌友たらしめることが出来るか、測り知る可からざるものがあらう。

但、「増一阿含經」の句を、釋尊治病の證據としたり、觀音經を文字通りに受取るには、釋迦の歴史が餘りに其反證となり過ぎる。前にも云つた通り、釋迦自身が耆婆の診察を受けて服藥せられたことや、耆婆の勸言に従ふて、教團弟子共の衛生に注意せられるやうになつたこと、涅槃に入られる以前より、釋尊自身が痛ましい病氣に罹られて、死なれる迄苦しまれたことなどの事實が、嚴として存在する以上「生長の家」の廣告は、誠に力無いものになつてしまつた。勿論私は何も、釋尊が自ら治病せられなかつたからとて、「生長の家」を其れを楯として攻撃するものでは無いので、「生長の家」が、無理に釋尊を精神治療の仲間入りさせやうとすることを、可笑しく想ふから一言した迄である。

之れを要するに宗教的權道としては、時に奇蹟的の治病も意義なきに非ざるも、常道としては治病は之れを醫師に委し、科學的法則を尊重す可きであつて、彼の治病致福を好餌として民衆を惑はし、醫師を排斥し、科學を無視する、似て非なる宗教々團の如きは世道人心の爲めに大いに警戒す可きものである。

以上私の論辯は便宜上主として「生長の家」の主唱者である、谷口氏の所説に對して試みたことになつて居るが、固より私の目的は谷口氏一人であるのではなく、所謂精神治療法を標榜せるもの、全体に對して、我々の態度を決せんとしたものである。尙「ひとのみち教團」も目下新興教團中、治病致福を盛んに標榜して居るやうであるから、左に少しく同教團のことを記述することにした。

附記 本稿の終つた際、「生長の家」では名古屋鐵道局が、局員全体が「生長の家」の小冊子を讀みし以來、七ヶ月間無事故であつたと云ふことを新聞で廣告して居るのを見た。果して其れが生長の家の冊子を讀んだお蔭であるとする、誠に慶賀す可きことだが、私が今より十四年前米國漫遊の際、ニューヨークのあの長い地下鐵道は、壹ケ年間無事故であつたことを公表して居た。そして其れは其歳ばかりではないらしい。無事故は必ずしも、名古屋鐵道局に限つたことでは無いことを一言して置く。

第九節 「ひとのみち教團」に就て

「生長の家」は、續々と所謂聖典なるものを公刊して居るので、其教旨は明瞭であるが、「ひとの道教團」では、別に教旨を詳述せる書物を公刊して居ないから、其教旨教條を確知することが出来ないが、私の見聞に依れば其要領は大概左の如きものである。

「人の道教團」では、恭しく教育勅語を掲げてある。其理由は後に説明しやう。此外に本教の教典には、

教宣、神律、神訓などがある。元來「人道」とは、神ながらの道、即ち自然の大道を指すのであつて、人間の正しく歩まねばならぬ道であるから、他の宗教のやうに、祈禱するとか、加持するとか云ふこともなければ、隨つて奇蹟をも説かないと云ふ。信仰は即ち德行であり、人間としての眞の道を行ふことである。苟も人間としての正しい道を行ひさへすれば幸福は自然に來る筈である。彼の病氣や災害は、人の道を歩まぬものに對する神の警告の外の何ものでもない。此神の警告を神示と云ふ。所で神に口なしであるから、此神示は教祖が神に代つて之れを爲す。已に神示を受ければ教祖は能く信者の特殊的事情を看破し、自然の秘密の啓示を得て信者に適切な教訓を爲し指示を爲す。

す。其言葉を神宣と云ふ。大概の者は此神宣をかしこみくゞて實行すれば、病氣も治るし、悪事災難も免れる。富貴繁昌も得られると云ふのである。尙此「人の道」の名物になつて居るのが「御振替」と云ふことである。これは神示が突如として現はれ、到底神宣を實踐躬行して、然る後に救はれると云ふ常の順序を踏むことが出来ない場合に、他日必ず神宣を受けて實行するとの誓ひの下に、それ迄の所此危急な病氣なり災厄なりを、教祖の身に振替へて貰ふことである。此お振替を願ふて急病が治ると云ふやうな場合は、信者は有りがたき勿体なさの餘り、頗る高潮した調子で其功験のいやちこさを宣傳するのは當然であるが、救はれ無かつたものは死人に口なしで、暗から暗に葬られる。よしや家族共は救はれなかつたことを知つて居るにしても、罪業深甚にして教祖のお振替の慈悲にも漏れたとあつては恥かしさの極みだから、口を噤むのが人情の自然である。そこが此種教團の大なる儲け物である。

さて此「人の道」教團に於ける行事を一見すると、毎朝多くの信者が集まつた所で青年團、處女會、婦人會、學生團、奉仕團などの人々が代るく體験談を試みる。一人の話がすむ毎に説教者は正面の祭壇に向つて、文字通り平身低頭して一禮、二拍手する。之れに和して會集も一禮、二拍手する。其響きは宗教感を高潮する効能がある。それから三三人の説教がつゞいて三十分も経つたと云ふ頃

に、指導者の指圖に依り一同立上り一寸体操めいたことをやる。餘り聴聞許りだと退屈するからであらう。そしてまた體験談が次々とは行はれる。病氣で神經過敏になつて居るものや、災難に遭つて困つて居るものや、一家の不和に悶へて居るものなどは、體験談なるものにつり込まれ易いのは云ふ迄もない。且、衆人群居の事として、群衆心理に支配さるゝことも強からう。さて説教が済むと指導者を中心に圓座を作つて座談會が始まる。これがまた前の體験談を補足して其功果を確實にする。誠に勧誘策は巧妙に仕組まれて居る。尙、已に信者になつたものは勞力奉仕を爲さねばならぬ。之れを「みそぎ」と稱して居る。天理教の日の寄進と同じやうなものであらう。安靜を必要とする肺病患者迄が、此みそぎを實行する爲めに斃れて行くものも少なくないと聞く。同教團の建築物などは、大工も左官も雜役も無賃でやるものが多いのだから、宗教と云ふものは有りがたいものである。治療と致富とは本教團でも多くの信者を引きつける動機をなして居る。本教團では「食ふに困らず、健康で長命」と云ふことを人間の眞幸福として居るが、事實は食ふに困らずの程度でなく、中々に信者の金錢慾をそゝつて居るやうである。教團は教へて云ふ、本教團の信者たらんものは、毎日の出費を一割許りづゝ節約せよ、例へば十圓の着物を買ひたいと思ふ時は九圓の着物ですまし、一圓の肴を晚餐に買はうと思ふときは九十錢ですます。其節約した一割の金を累積して置いて教團に寄進するならば、其れはやがて

十倍になつて信者の手に還つて來ると。金錢慾の強い現代人から金錢を寄進せしむるには誠に適當な方策である。之れを信じて實行するものが無智な連中許りかと思へば、相當インテリの連中迄が信じて居ると云ふ。金錢慾が人間を盲目にするの甚だしいことが今更の如く痛感せられる。其上此教團では如何なる病人でも、苟も動けないやうなもので無い以上は勞働奉仕を勧める。それが圖に當つて昭和七年頃迄は、本部でも小さな木造の説教場のやうなものを有するに過ぎなかつたものが、インチキ問題で警察沙汰になつて却つて社會の耳目を引き、信者が俄に多くなり、昭和九年には間口三十二間、奥行四十七間の堂々たる鐵筋コンクリートの大殿堂、其他多くの附屬建物を續々とやつて居る。しかも是れは假本殿で、やがて地を相して眞本殿を造營するのだと豪語して居る。

「人の道」教團の教祖は御木徳一氏で、もと徳光教々祖金田徳光氏の弟子たり、愛媛縣松山市外朝海村とかの農家に生れ、幼にして附近禪寺に入り、三十二才で住職にはなつたが貧乏寺なので生活も豊ならず、寺内に織物業を營んだりしたが其れも失敗に終り、郷里にも居りにくくなつたので大阪に飛び出した。しかし大阪にも幸運は待つて居らず、始めは名もなき新聞の記者になり、露天商人ともなり、郵便脚夫ともなると云ふ風に、生き金が爲めに其職を轉々したが、何れも想ふにまかせず、妻にも死別して小供を株屋に遣る、娘を女中奉公に出す、此不遇の中に長女が痰咳病か何かに罹つたの

が機縁となつて、御嶽教徳光教會の信者となり、遂に弟子入りして徳光氏の死後、其衣鉢を受けたりと稱し、大阪市に御嶽教人道徳光教會を開いたのが大正十四年のことである。依つて徳光氏を幽祖と稱し自分を教祖と稱す。それが昭和三年に至つて扶桑教に屬し、大阪市外大軌沿線小阪停留所附近に、前に述べた木造教會を立てたが、初めは一向振はず、門前雀羅を張ると云つてもよい程であつたが、昭和六年に「ひとのみち教團」と改稱し、翌七年に法難に遭ふた頃から俄に盛大となり、今では全國に信者數十萬を有し支部教會の數も百に餘ると聞く。

「ひとのみち教團」の教祖御木徳一氏は、幽祖金田徳光より其死に臨み、徳光の神訓に依り体得せる所のもの一切を傳授せられ、徳光の遺言に依り自ら教祖となり、天津神離を護つて修養し、幽祖の遺せる神訓に新に三個條を添加し且、神律六十個條を作つて教義を形成したと稱して居る。所がこゝに幽祖徳光の嗣子に金田喜一郎氏なるものあり、父の薫陶を受けて徳光教の神訓一切を譲られ、徳光在世の時に「金田喜一郎を以て徳光教會第二代の教主と爲す」と云ふことを大神に奉告したと云ふ。そして此奉告祭には全國多數の信徒參拜し、現に御木徳一氏も列席して玉串を捧げた一人である。そこで之れを事實として肯定すると、御木徳一氏は虚構して教祖になつたことになり、こゝに端なくも金田喜一郎氏との間に本家争ひを生じ、喜一郎氏は神道徳光教本部の名に於て新聞紙に聲明書を發

表した。(昭和九年十一月十日大阪朝日新聞掲載)「ひとのみち教團」では、之れに對して辯明的聲明書は出さなかつたやうである。單なる默殺であるか、それとも喜一郎氏の聲明書を事實として承認する外が無いのか、「ひとのみち教團」も、危く人道を踏み誤つた疑ひを受け、少くも發足點に暗影が投げられた。

是れは「ひとのみち教團」に限つたことでは無いが、病氣を不道德の結果であると見ることは、一種の教誡方便としての價値はあるかも知れないが、道理上より云へば肉体的法則と、思念的法則とを混同せる恐れがあつて甚だ承認しがたいものである。此事の反對論の一證として、昔から能く提出せられる例は、顔淵の天死である。顔回は孔子三千の弟子中道德第一の人物で、論語を讀むと孔子は口を極めて顔回を讚美して居る。これ程の人物が肺病か何かに罹つて常に苦しみ遂に天死したのは何故であらうか、如何に強辯者でも顔回を不道德者呼はりするものはあるまい。若し顔回すらも不道德な事があつたために、不治の病に罹つて天死せねばならなかつたとするならば、天下の人々は凡て何か重病に罹らなければならぬことになるではないか。否、例を遠く二千五百年前の春秋時代に求める迄もなく、現代に於ける實際を見ても、道德と疾病との間の因果關係を云々するが如きは、如何にも不合理なと云ふことを示す反證が幾許でもある。元來道德に於ては自ら責むること重く他を責むること軽く、常に反省して人の爲めに謀つて忠ならざるか、朋友と交つて信ならざるかと云ふ風に、自分

の言行を改めて行くことを第一要件とするものであるが、斯くすることが病氣に罹らないこと、積極的關係ありとは何としても考へられぬではないか。之れと反對に、世には安價な樂天家と云ふものがあつて、常に獨りよがり満足して、鋭い反省など全く爲さないやうな人物に年中病氣に罹らず、健康其ものゝやうな例が多いではないか。若し不道德を病氣の正因とするならば、刑務所に入つて居るやうな人間は、一人も病氣の無いものはなかりさうなものでないか。病氣を不道德の結果とするが如きは、餘りに世の中の事實を無視し過ぎて居る。勿論人間は如何なるものでも鋭く反省して見れば、十全と自信するものゝあらう筈が無いから、病氣で神經質になつた人物に、何々の不道德が原因だと巧みに説き聞かせたら、何か思ひ當つて眞に受け易いが、其様な弱點につけ込むのは如何にも卑怯な勸誘法と云はねばならぬ。

かく云ふと、人の道教團では云ふ、善因善果、惡因惡果で道德と健康、幸福、不道德と疾病、不幸とは相伴ふ可き筈なるに不拘、世に其事實が充分に行はれて居ないのは、是れは善惡の標準と云ふものが間違つて居たからである。道德上の善惡の絶對的標準と云ふものを、從來世界の人は把握して居なかつた爲めである。苟も此絶對的の善惡の標準と云ふものを明瞭に遵奉するとなれば、道德と健康、幸福とは必ず相伴ふものである。然らば其絶對的標準とは何であるかと云ふと、其れは教育の

勅語である。明治二十三年十月三十日に畏くも明治天皇の降し給ふた教育の御勅語であると云ふ。

然し教育勅語は、我々大日本帝國臣民に御下賜になつた國民道德の軌範である。萬世一系の皇室を奉戴する我々帝國臣民たるもの、遵守す可き、國民道德を御示しになつたものである。我々人間は一面に於て世界の人類であると同時に、一面に於ては國家の人民である。世界人類として平等に守る可き道德は、倫理學に於て論定するものである。此は普遍的のもので、世界何れの國民たるを問はず人類は皆之れに順ふ可き筈のものを指示するものである。然るに我々は世界の人類であると共に、或る特定國家の人民である。随つて特定國家の人民としての道德、即ち國民道德と云ふものをも遵守せなければならぬ。順序としては我々は先、國民道德を遵奉して、之れと支障なき範圍内に於て、世界人類として的一般道德を遵守す可きものである。此一般道德と國民道德との差別は、小學校令の第一條にも明白にせられて居る。

第一條 小學校は兒童心身の發達に留意して、道德教育及國民教育の基礎並びに、生活に必須なる普通の智識、技能を授くるを以て本旨とす。

とある。大日本帝國臣民の一人をも漏さず、教育を施さんとする義務教育の程度の小學校教育に於てすら、二様の教育が並べて規定せられて居るのである。此國民教育の根幹となるものが國民道德で、其

軌範を教育勅語に於て御教示遊ばされたのである。

回顧すれば、明治維新以來、日本は銳意歐米文物の輸入に努めたが、元來日本には三千年來の光輝ある歴史あり、萬世一系の皇室を奉戴して、涵養し來れる國民道德あり、其れが餘りに歐米文物を輸入するに急なるものから、一時歐米崇拜熱が高まつて、動もすれば國風、國俗に背馳せんとする現象をも見るに至つた。そこで明治二十年前後より、國粹保存論が盛んに起つて、こゝに所謂新舊思想の衝突を到る所に演ずるやうになつた。畏れ多くも明治天皇は、之れを御軫念遊ばして、帝國臣民の爲めに國民道德を御明示遊ばされ給ふたのが教育勅語で、こゝに我帝國臣民の遵奉す可き國民道德は、炳として日星の如く、萬世不磨の典範となつたのである。固より御勅語の中には「之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず」との御言葉はあるが、然し、此は御勅語の高明正大なる大精神を御諭しになつたもので、帝國臣民外のものをも包括遊ばされやうとの、大御心と拜す可きものでは無からう。其れは

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ

と仰せ給ふた後に

我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ

淵源亦實ニコ、ニ存ス

と仰せられ、其次に又

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ

と仰せられてある。此ノ如ク「我カ臣民」「爾臣民」と云ふ風に、御呼びかけ遊ばしてある所から見ても、此御勅語が我大日本帝國臣民の爲めに、御降し遊ばされたもので、則ち我國民道德の軌範を御示しになつたものであると云ふことは明かであると思ふ。そして此國民道德の軌範は、決して倫理學の研究する一般道德と、悖戾するやうなもので無いことは云ふ迄もなく、それが即ち「之レヲ古今ニ通シテ謬ラス、之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」と仰せ給ふた所以であると拜察するのである。

元來世界に樹立せる國家は、何れも民族、歴史、國體等を異にするもので、一般普遍的道德の外に此特殊性を加味したものが國民道德であるから、其れは國家の相異なる毎に幾分か特殊的な點が無ければならず、わけて世界に比類なき三千年の歴史を有する、萬世一系の大日本帝國の如きは、其特殊性が極めて顯著な次第であるから、我國民道德と云ふものは、歐米各國の其れとは嚴乎たる差別があることは言を俟たない。近時國體明徴の聲、朝野に高いのは當然のことである。

我國體の萬國比類なき事が根幹となつて、出來上つて居る國民道德と云ふものは、我々日本臣民に

とつては固より、絶對的の道德の標準で、若し不幸にして之れが一般人類道德律と衝突するやうな場合があつたら、我々は一般人類道德律に背いても、國民道德に順はねばならぬものである。然し其れは杞憂であつて、教育勅語に「之ヲ古今ニ通シテ謬ラス、之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」と仰せ給ふ如く決して一般人類道德律に衝突するやうなことは有り得やうとは思はぬ。若し衝突することがありとすれば、其れは他の國家の國民道德との衝突であらう。想ふに萬世一系の皇室を敬仰する我國民道德は共和國體などの國民道德とは相異なる所のあるは當然のことで、隨つて彼我國民道德が、何かの場合に衝突すること無しとせず、固より對等的に國際關係にある以上、各國は平常御互に其國民道德に敬意を表す可きもので、我を以て彼を律せんとするが如きは、國際間の禮儀に非ず。然し非常時に當つて、彼我相衝突するが如きことあらば、我國民は絶對に光輝ある國民道德を確守す可きものなることは云ふ迄もない。是れ御勅語に「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼ス可シ」と仰せ給へる所以と拜察する。

右の如く教育勅語は、我光輝ある國民道德を御教示遊ばされたものであるに「人の道教團」は之れを一般道德と混同して居ることは、甚だ遺憾千萬なこと、言はなければならぬ。我國民は、其特殊なる國民道德を發揚して行く所に、光輝ある三千年の歴史は、天長地久益々發展長養せられる譯であると

同時に、彼我相衝突する所の無い限りは、國體、歴史等を異にせるより來る所の外國の國民道德を蔑視するが如きことがあつてはならぬ。相互に對等國として交際せる以上、甲國民道德を、乙國民道德を有するものに強ひることは出來ない。如何に甲國の國民道德が優秀性に富んで居ると信じて、之れを乙國民に強ひてはならぬ。其は國民道德なるもの、根本性に悖戻するからである。一般道德と國民道德との差異は其處にある。若し某國民が平時に於て、一般道德に背くことがあれば、我々は人類として之れを責めることが出来る。それは一般道德は其性質が人類共通のものであるからである。それと國民道德とを混同してはならぬ。之れを混同する時は、他國に對して禮を失するものであるのみならず、徒らに彼我の間に感情の衝突を招くに至る。此は國際上非常に大切なる事である。如何に我國民道德が世界に比類なしと信ずると雖も、之れを假りに其國體と歴史とを異にする米國に強ひんとする時は、必ずや彼れの反感を買ふに定まつて居る。此點に就いて「人の道教團」の認識が頗る不足して居ることは甚だ遺憾な次第である。

次に「人の道教團」が教育勅語を治病致福に掛けて説くことは、誠に畏れ多く感ぜられる。固より教育勅語は、我々國民の絶對的に遵奉す可きものであり、又之れを遵奉することが、我々帝國臣民たるもの、幸福な生活を爲し得る基準でも有ることは言を俟たないが、然し、其幸福はご迄も道德的

性質のものであることを忘れてはならぬ。之れを治病致福と云ふやうな方面にまでも及ぼすことは、却つて、御勅語の大精神に悖戻するものではあるまいか。病氣は先天的の體質、境遇等より來るものであつて、如何に教育勅語の大精神を遵奉實踐するものでも、決して病氣に罹らぬと云ふことは云へない筈である。畏れ多くも宮内省には侍醫寮が置かれてあるではないか。教育勅語の完全模範で在らせられ、神聖にして侵す可からざる 陛下に在らせられても、御不例に渡らせらるゝことあればこそ、侍醫寮が置かせられて居るのではないか。のみならず臣民の赤心を思召されて、御不例の際は宮内省より御模様を告示せらるゝでは無いか、特に我々臣民の今日も、尙恐懼に堪えないことは、大正天皇の御惱の御様子を告示せられた當時の事である。然るに疾病は、教育勅語の御精神に悖るより來ると「人の道教團」は言つて居る。何たる履き違へであるか。かゝる履き違へをすることこそ、御勅語の大精神に背くものでは無いか。固より教育勅語は申すも畏し、一般道德を守る者も、之れを不道德者に比すれば、良心の平安が身体に影響を及ぼす結果、罹病率の少なき筈ではあるが、然し、元來肉體には肉體の自然律がある以上、道德で以て其自然律を左右し得るものではないから、如何なる道徳者も苟も肉體を有する以上、罹病することあるは免る可からざる事實である。然るを之れを無門せんとするが如きは、恰も太陽系の自然律を無視して、地球の運動を中止せんとするやうなものである。

る。愚もまた甚だしいでは無いか。

此肉体の自然律に基いて醫師は治病を司るものである。然るを「人の道教團」に於ては、醫療を排斥して居る。其排斥の根據が自由意志に基く道徳と、自然律に基く疾病とを混同せる所より來るのであるから、結局是れも認識不足に基く。然り、之れを單に認識不足のみは片付けられぬ。かゝる教旨よりして世道人心を害するが如きことあらば、其れは赦すことが出來ぬではないか。云ふ迄もなく病は氣からと云ふこともあるから、心の態度が治療上大なる關係あること、隨つて精神治療なるものも之れを認めねばならぬことは明かであるが、然し、其れは副貳的のもので、治病の正經としては何としても醫療を第一となさねばならぬ。然るを其醫療を全然排斥せんとする所の「人の道教團」は、如何に宣傳の爲めとは云へ。餘りにも極端に走つて居るではないか。

次に致福に就いても「人の道教團」は認識不足である。孔聖も「富貴天に在り」と言つて居るではないか。人の富貴となるや否やは先天的素質、境遇事情、運命等に因ることが甚だ多いもので、如何に教育勅語の大御心に忠實であつても、必ずしも富貴となり得るものではない。固より道徳を守ると云ふことは、富貴の必要條件ではあるが、然し決して之れのみで富貴が得られるものではない。先天的素質の無いものは、到底大學者にもなれなければ、大臣、大將にもなるものでない。如何に忠實に働く

ものでも、商才の無いものが巨富を得られるものではない。又たとへ素質の優良なものでも、人力の如何ともする能はざる運命の手に左右さるゝことは、免る可くも無い。かゝることを混同するからして、人事意の如くならざる場合に、天道是か非かと云ふやうな、愚痴に墮するのである。其結果は却つて道徳を疑ふやうになる。憂ふ可きことである。

支那では聖人と云へば堯、舜、禹、湯、文、武、周、孔を數へる。中にも堯、舜は聖人中の聖人と敬仰せられ、後世長く堯、舜の治を稱し、理想的の時代となつて居る。所が、其聖天子堯の時代に黄河九年の大水あり、慘害甚だし。堯は鯀に命じて治水せしめたが効なし。舜位を嗣ぎ、禹に命じて治水せしむ。禹は十年の間、家門を過ぐれども入らずと云ふ程の努力に依つて、遂に治水の効を擧げた。此功に依り舜は己れの子を措いて、禹に位を讓つたと云ふ。支那は天子の位の根據を道徳に置いて居る國であり、聖人は道徳の萬民に優れた表證であり、其聖人中の聖人たる堯、舜の治世にすら天災地變の免れなかつたことを見れば、此一事道徳と自然律とは、其領域を異にするものなることを證して餘りあるでは無いか。

要するに私は「人の道教團」が、教育勅語を中心として、人々に惟神の道を説くは甚だ賛成であるが、前述の如く之れを履き違へて、自然律を無視するに至つては、其説く所は「生長の家」と相異なる

る所はあがるが、結果は同じ邪道に墮する。今や伊太利とエチオピアとの間に戦端が開かれ、赤心愛國に燃ゆるエチオピアも、飛行機、機關銃、タンク等の近世武器を持たぬ悲しさに、非常なる犠牲を餘儀無くせられつゝあり。云ふ迄もなく、此等の武器は全く科學の應用に因るものである。私は科學を無視せんとする「生長の家」や「人の道教團」に此明瞭なる事實を正視することを勧告したい。

尙、是れは新聞記者氣質の一なる、人目聳動策より來れる所も多からうとも想はれるが、然し「人の道教團」平素の説教振りにも、同一の風が窺はれもするのであるが、去る九月二十一日より連日、某新聞紙上宗教欄に「ひとの道の教」と題して「現實に於て慾望を肯定満足する福音」、「一切の迷信を排して實證の世界を宣明」、「徳行家さへ陥る人生の惱みの眞因」、「絶對道德律を以て幸福の生活を指導」、「人生る道とは何ぞ、生ある者は現實に終始す」、「日の大君に仕へ奉る、これぞ人生幸福の道」、「萬人幸福の絶對道、生くる道の唯一指針」等々と題して讀者を驚かして居る。そして其内容は前に述べた通り、一般道德と國民道德とを混同せる立論である外、何にも無いのだから、此様な宣傳を見慣れた私も一驚せざるを得なかつた。

「生長の家」と云ひ「人の道教團」と云ひ、私は何等恩怨の關係あるものに非ざるも、身荷くも教育に従事するものなるが故に、世道人心の爲めに黙止する能はず、所見を陳述して「生長の家」「人の

道教團」に限らず、此種類似のものに屬する色々な宗教々團に對する、世人の認識を誤るなからんことを切望するの外、一毫も他意あるものに非ず。「生長の家」と云ひ「人の道教團」と云ひ、其教説の中には、修養上参考となるものも無いことはないが、然し熱心の餘りか、爲めにする所ありてか、全く高等常識を逸して、科學を無視し、論理を顧みず、又在來の哲學、宗教を曲解するの宣傳振りは、心あるものゝ默視す可きもので無いと信するよりして、私は私の宗教論の終りに、特に一章を増して右の如く述べた次第である。

(完)



複
製

不
許

宗教大觀

【定價四圓】

昭和十年十月二十五日印刷
昭和十年十一月三日發行

著者 伊賀駒吉郎

發行者 大阪府中河内郡布施町
樟蔭女子專門學校內
潮田玄丞

印刷者 大阪府西區薩摩堀東之町二六
小野義明

印刷所 大阪府西區薩摩堀東之町二六
小野印刷所

發行所 大阪府中河内郡布施町
樟蔭女子專門學校內
樟蔭女子專門學校出版部

大賣捌所 柳原書店

大阪府東區北久太郎町四丁目
電話船場 四一四番
振替大阪 二三一七番

(本製橋倉)

伊賀駒吉郎氏著作

和	心	<small>比日 較米</small>	<small>比三 較都</small>	文	女	日	東	心	感	心
漢	理	感	大	學	生	本	洋	理	情	理
吟	學	想	阪	寶	大	教	四	學	教	學
詠	新	研	究	典	觀	育	千	要	育	原
集	論	錄	究	典	觀	學	年	義	論	論
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全三册
菊判三八〇頁	四六判五三〇頁	四六判三三〇頁	四六倍判一五〇〇頁	菊判一一〇〇頁	菊判九〇〇頁	菊判一三〇〇頁	菊判九〇〇頁	菊判九〇〇頁	菊判八五〇頁	菊判約三〇〇〇頁

690
59

Vertical stamp or text, mostly illegible.

10年 / 2月 10日

119

閱覽齊

